特207
308

②

0049344000

0049344-000

特２０７－３０８

国文法指針

太田行蔵・著

健文社

昭和１１

AHJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

學習
受驗

國文法指針

太田行藏著

特207
308

東京 健文社 發行

特207
308

驗受習學

國文法指針

本田行藏著

僑　社

緒　言

國文法の參考書も隨分ある。だがこんな行き方のは一つも無い。

例へば「文法飽くまで學ばざるべからず」といふ一節には、同一の問題に對して、いろ〳〵な受驗雜誌の解答號が、それ〴〵まち〳〵な解答をしてゐる例があげられてゐる。

また、意味の容易にとれないやうな出題の例もあげてある。これは、國文法といふものが、教へる人や解說する人にはわかつても、學ぶ人や受驗生にはわからぬといふやうなものではなくて、實は誰でもまごつく部分はあるのであるから、諸君が今迄のやうに受身になつて教へられてばかり居らずに、自分で考へる、批評するといふやうに、積極的になつて貰ひたいといふ心持のあらはれの一例である。

自分の國の言葉、毎日自分の使つてゐる言葉、その性質や用法を研究するのに、從來の教へる人も學ぶ人も、少し堅くなつてゐすぎたのではあるまいか。存外平凡なことをシカツメらしく言ひすぎた本が多いのではあるまいか。本書はさういふ弊におちいることを極力避けてゐる。

本書が特に讀んでいただきたいのは、「講評」である。これは各學校の教授が、入學試驗の答案を調べての結果を文部省に報告したものであつて、中等學校の先生や生徒に對しての、この上もなく大切な意見が含まれて居るのである。これらの教授に答案を採點されようといふ諸君が、これを知らずに居ていい筈がないのである。（この意味で、本書は各專門、高等學校教授總掛りで諸君におくる編著と言はれてもいいのである。

いま少し氣樂な態度で、面白く學ばるべきものは文國法であらう。いま少しその必要の痛感されていいのも國文法であらう。だが今までのやうな重苦しい無愛想な國文法では、若い學生諸君に親しまれないのも無理はない。本書はシカツメらしくなく、必要な部分を明瞭に、といふことを念願として作られ、その上に受驗者に貴重な參考資料を示してゐるといふ點で、國文法參考書としてこれまでに類の無いものであるといふ自信を持つものである。敢て諸君の机上にすすめる所以はそこにあるのである。

心の底も見ゆるなれば
心あさやと
よしさらば散るまでは見じ

およそかうした語句を解釋するにも、これを組み立ててゐる一語一語の意味を正確に知ることがどの位必要であるかは言ふをまたぬ。文法をなほざりにする人の解釋は、自分では出來たつもりでゐても霞んでゐる、ボヤケてゐる。

受驗學習

國文法指針

目次

一　キヤスチングボートを握るもの……一

二　この聲に聽け（試驗官の講評）……三

すぐれた答案の出來る筈が無い（松本高校）……四　戒心すべきこと（山形高校）……五　確實性の乏しい答案（大阪高校）……六　重要な役割（松江高校）……八　粗雜の弊（水戸高校）……一〇　遺憾なる點（靜岡高校）……一一　解釋は文法を頭において（高松高商）……一三　助詞に敏感なれ（松本高校）……一四　そんな間違は出來ない筈である（廣島高校）……一五　採點上注意を拂つた事項（大分高商）……一六　文法の必要（七高）……一八　恥辱である（六高）……一八

三　文法飽くまで學ばざるべからざる理由……一八

四　勝利への確實な近道……二四
五　各校國文法問題とその解答及び各校教授講評……二六

單語篇

一　五十音圖を明瞭に知れ……一三三
二　單語と品詞……一三五
三　體言と用言……一三七
四　名詞……一三八
五　數詞……一三九
六　代名詞……一四〇
七　動詞……一四一
一　動詞の活用……（一三三）　二　動詞活用の種類……（一三九）

八　形容詞……一四四
九　形容動詞……一四五
一〇　音便……一四七
一一　副詞……一四八
一二　接續詞……一四九
一三　感動詞……一五一
一四　助動詞……一五一
一五　注意すべき助動詞……一五八
一六　助詞……一六一
一七　係結……一六七
一八　紛れやすい品詞……一七〇

文章篇

一　文の成文……一七六
二　文の構成……一七八
三　節(句)の種類……一七九
四　文の構成上の種類……一八〇
○動詞助動詞接續表
○出題大勢一斑

受驗學習

國文法指針

太田行藏著

一　キヤスチングボートを握るもの

東京の大井町驛から大森の方へ行く乘合自動車の中で、二人の高等學校生徒が、しきりに話してゐる。それは、「さもあらばあれ」といふ言葉を何と解釋したらいいかといふことについてであつた。互にいろ〳〵言つてみるが、どうもぴつたりと來ないらしい。うまくあてはまりさうな言葉を探してはあてがつてみるが、どうもいけない。大袈裟にいへば、二人はそのもどかしさを解釋すべく苦心慘澹してゐるがどうにもしやうがない。私は二人に言つてやりたかつた。君達は當然の、そして最も簡單明瞭な道を忘れてゐる。それを單語にわけてみたまへ。そしてその一つ一つの意味を考へてみたまへ。ぴつたりした答が出て來る筈だ。さう私は言つてやりたかつた。

さ　も　あら　ば　あれ

さは、「いやさにあらず」なんかとチヤンバラなどでいふあの「さ」である。口語の「さう」である。

もは、「だまつてもゐられない」なんといふ時の「も」である。「雨いたくも降り」のもである。

あら　ば　は「金あら　ば　貸して下され」の　あら　ば　である。

あれは、「われに母あれと思ふ」のあれである。「汝そこに立ちてあれ」のあれである。

さう　まあ　あるといふなら　さうせよ

といふ原意がわかつてみれば、その場合場合で、「ままよ」といふもよからうし、「それはそれとして」といふもよからうし、「勝手にしろ」といふもよからうし、何とでも解釋はつく。一つ一つの言葉をかへりみずに意味をとらうとするのは目をふさいで景色を見ようとするのと餘りちがはない。

文法が好きだなんといふ學生は餘りあるまい。英文法はまだしも、國文法と親しまうといふ學生なんか、一人も無いと言つてもいいかもしれない。そこが、その事實が、受驗戰に臨まうとする者の目のつけどころでなくてはなるまい。英語・數學といふやうな堅壘に向つて正面から突きかかつて行く力も勇氣も大切には相違ないが、國文法が如何に最後の及落を決する武器であるかといふことを知らねばならぬ。

「國文法で滿點を稼いだところで、それは二十點か多くて三十點に過ぎない。」

かういふ考へから國文法を輕んじてかかる人は、次の事實を何と見るか。二大政黨が對立してゐる場合、その勢力が伯仲して居れば居るほど、その間に介在する小數黨が、運命を決裁する實力を持つものであるといふことを。國文法の得點數は英語や數學に比較すると少い。しかし各戰士の實力が英語や數學に於ては、かなり接近して居ると思はれなければならぬ場合、及落のキヤスチングボートを握るものは、さうした少數黨であると考へなくては嘘だ。

「自分の受ける學校には國文法は無いんだから。」

こんな考へから國文法をかへりみない人があるとすれば、それこそ見えざる敵の存在を忘れる愚人であると言はねばならぬ。これらの事實を、私は、諸君の運命を左右する位置に居る各學校の教授講師たちの言葉をかりて說明しよう。

二　この聲に聽け（試驗官の講評）

各學校では入學試驗を行つた後、その答案に對する講評をものして文部省に送ることになつて居る。この講評こそは、受驗生諸君のまさに刮目して見るべきものであらう。その講評の中から、特に諸君の注意をうながすべきものと思はれるものを拾つてあげてみる。

（前略）單に文法のための文法ではない。國語を正しく解し正しく綴ることがむしろ本領なのである。實科的に考へても、文法は中等學校教科書を精讀しておけば、たやすく滿點がとれるのだから、受驗者にして文法をないがしろにするなどは愚の骨張である。（高知高等學校講評の一部）

文法をないがしろにするは愚の骨張とまで極言されて居るのである。誰もが油斷し遠ざける國文法に力をさいて、前に述べた少數黨の威力を發揮することは、けだし最も賢明な策戰であらう。なほ國文法の必要についての各學校の講評をあげてみる。

『すぐれた答案の出來る筈が無い』（松本高校）

（一）左ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ、

あぢきなき中にも筆執りて書きすさべばいと心ゆきて何事もうち忘らるゝぞかしさるは後の世に傳へてと思ふにもあらず又世の人にとにもあらず唯心なぐさみに思ひうるまに〳〵書きつらねてさて立ちかへり見ればわれながらこれは言ひ得たりと思ふもあり又をさなき事どもの多かるもをかしうてつれ〴〵なる日を過すには何事かしかむ誰もかゝりやあらずや

【講評】

いつもいふことだが、國語の特色は助動詞、助詞の用法にもあるのだから、これをぞんさいに取扱つては、すぐれた答案は出來るものでない。たとへば

「あぢきなき中にも」

「後の世に傳へてと思ふにも」

「又世の人にとにも」

などの「にも」、

「うち忘るるぞかし」の「ぞかし」、

「思ひうるまに〳〵」の「まに〳〵」

などは十分注意すべき詞である。また

「さるは」「さて」

などの詞も解釋上に肝要なものであることは、いふまでもない。

『戒心すべきこと』（山形高校）

左の文を平易なる口語にて解釋せよ

（一）御寺の花雪のあしたなどのやうに咲きつらなりたる上にわざとかねて外のをも散らして庭にしかれたりけるにや牛のつめもかくれ車のあとも入るほどに花積りたるにこずゑの花も雪のさかりにふるやうにぞ侍りける

【講評】

この問題の解釋文の中で、「庭にしかれたりけるにや」の「や」を全然等閑視して居るが如きは、例

年の事ながら、助詞に對する關心の程度を物語つて居るもので、國語學習上大いに心すべきことである。

『確實性の乏しい答案』（大阪高校）

（一）よくも心得ぬ事をあしざまに難ずれば却りて身の不覺顯はるるものなり大方口輕きものになりぬればそれがしにその事な聞かせそかの者になる見せそなどいひて人に心をおかれ隔てらるる口惜しかるべし又人のつつむ事のおのづからもれたるにつけてもかれ話されしなど疑はれむ面目なかるべし

【講評】

「大方口輕きものになりぬれば……」の一句は本問題の中樞をなすものにして、この一句の解釋如何が全文の意味徹底に最も重大なる關係あるにも拘らず、これに深く注意することなかりしは、本問題に對する理解の程度の甚だ微弱淺薄なりしことを證するものにあらずして何ぞや。特に人稱の關係（編者註。主語述語の關係等）曖昧にして解答に確實性乏しく、果して全文を正當に理解しあるや否やを疑はざるを得ざるもの多かりき。

「口輕きもの」と「それがし」との關係。

「それがしにその事なきかせそかの者になる見せそ」とは誰の言葉なるか。

「かの者」とは誰を指すか。

この點を明確に解答する者少かりき。

全文の主語の捕捉。「な……そ」の關係。文に省略のあること。これらにつきて無頓着なるもの多かりき。

テニヲハ（助詞）、助動詞を輕視するか無視する者の多かりしは、語學學習の立場よりして大に考慮すべき問題なり。

（二）とくさかなむ心ゆくばかり眺めくらさばやとまだけしきだたぬ程より待ちわびたりし花のややほころびそめては夜のまの風も心もとなくて世の中にたえて櫻のなかりせばと嘆きけむふるごとさへ思ひいでられて春ばかり人の心ののどけからぬやはありける

本問は、「なむ」「ばや」「やは」の助辭に就きて問ふことを主としたるものにして、引歌も極めて通俗的なるを選びて、擬古文に對する理解と文法上の知識とを試みたり。

「重要な役割」（松江高校）

問題

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ。

（一）今の心にて思へば古はよろづに事たらずあかぬ事おほかりけむされどその世にはさはおぼえずやありけむ今より後また物の多くよきがいでこむ世には今をもしか思ふべけれど今の人事たらずとはおぼえぬが如し

【解評】

正解又は稍それに近いと認められる答案は、其の總數の約三分の一で、其の他は部分的に誤つて居たり、又全文の意味を全く取違へてゐる者などであつた。答案中に現はれた缺點を擧げて見ると大體次の樣である。

「多かりけむ」を「多かつた」と譯してゐる者。「多かつた」として更にそれを「されど」と續けて「多かつたけれども」と記したのが相當に多く、「けむ」が推量助動詞であり、其の終止形であることには全く無關心であること。

「その世にはさはおぼえずやありけむ」の「その世にはさは」の解釋の的確を缺いてゐる者、「おぼえずやありけむ」を、單に「おぼえなかつた」と解した者のあつたこと。（編者註。疑問の助詞「や」を無視したのである。

左ノ和歌ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

（二）ひとりたつ身になりぬともおほしたてしおやのめぐみをわすれざらなむ

第二問は、明治天皇の御製であり、受驗生は必ず一度は讀んだ事があると思つたが、正解したものは總數の四分の一であつた。これは文法で習得した智識を應用すれば比較的容易に解釋出來ると思つて出題したけれども、「わすれざらなむ」の「なむ」の用法に注意しないで解釋した者が多かつた。

以上は各答案に現れた特殊な誤謬や稍共通なものを擧げただけであるが、更に翻つて、かやうな結果の生れる根本原因を考へてみると、それは色々あると思ふが、受驗生の文法力の薄弱な事もその重要な原因の一つとなつてゐる事は見逃し難い。受驗生の文法力は年々減退して、近年の受驗生中には全く文法の知識を缺いてゐるものもあるやうである。本校では解釋作文のみで、文法書取は課してゐないが、文法や書取は國語解釋の重要な役割をなすものであるから、それが試驗課目にあると無いとに拘らず受驗生はその勉强を必要としなければなるまいと思ふ。

尤もかういつても、或は之を文法の問題として課すれば、或程度まで解答し得るかも知れない。しかし私のいふのは、文法のその樣な、機械的な暗誦ではなくて、文法力の常識化を力說するものである。（中略）

要するに國語の解釋や作文の時間に生徒が今少し文法に對する關心を深めて、解釋・作文・文法を結びつけて考へる樣に、こひねがはざるを得ない。

『粗雜の弊』（水戸高校）

第二問

室は長物無きが好く庭は穢草無くば足れり一室ただ淸々楚々として塵無く淨らならんにはあり合せの小瓶に野の花の數枝を挿したらんも趣あるべし小庭おのづからなる委整ひて紙屑瓦礫下駄の跡の見苦しきだに無くば夜の市の小株物鉢おろしの矮き樹にをかしからぬ石をあしらひてもながめは生じなんたゞ庭内も室中も先は事々しからで目安きこそ貴ぶべけれ

【解　評】

（前略）なほ第二問に於ては特に助動詞、助詞の解釋不十分の爲に生ずる誤解甚だ多し。その一二をあぐれば

「淨らならんには」

「挿したらんも」

「ながめは生じなん」

等の句を粗雜に、或は全然誤解したるもの最も目につきしものなり。

『遺憾なる點』（靜岡高校）

問題（一）（二）

次ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

（一）神無月中の五日の暮方に、庭に散りしく楢の葉を、もの蹈み鳴らして聞えければ、女院世をいとふところに、何者の訪ひ來るやらむ。あれ見よや。忍ぶべきものならば、いそぎ忍ばむとて、見せらるゝに、小鹿の通るにてぞありける。女院、さていかにやいかにと仰せければ大納言の佐の局涙をおさへて、

岩根ふみ誰かは訪はむ楢の葉のそよぐは鹿の渡るなりけり

女院この歌あまりにあはれに思し召して、窓の小障子にあそばし留めさせおはします。

【解　評】

一々の語句の解釋について見るに、

「聞えければ」を「聞ゆれば」「聞えけるが」

「何者の訪ひ來るやらむ」を「何者か訪ひ來べき」「何者か訪ひ來るなるべし」

「見せらる」を「見らる」
「いかにやいかに」を「いかならむ」
「誰かは訪はむ」を「誰をか訪はむ」
といふやうに、それ〳〵誤つたものが少くない。これらはいづれも助動詞や助詞に細心の注意を拂はなかつたための誤である。
「あそばし留めさす」
これを正しく解き得たものが少かつたのは「あそばし」が尊敬の意をあらはす語たるを知らなかつたためであらう。

次ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ
(二) この物語のうちに春夏秋冬をり〳〵のけしきをかけるところはことさらにえんだちみやびたる詞多くしていひしらずめでたきは誰もよく知りたることにていまだしき輩はこれをのみしきりに譽めて名文なりなどいひのゝしるめりされどこのけしきをかけるところはあながちにえんだちたる詞をのみむねとしてかけるにはあらでみなその時々にかきあらはしたる人々の心によくあはせて事がらのあはれを深くせむためなりかし。

【講評】
難解の語句もなく、隨つて成績は概して良好であつた。たゞ受驗者が助動詞や助詞に綿密な注意を拂はなかつたために、完全な答案が得られなかつたのは遺憾である。即ち助動詞「めり」や、助詞「か

し」を看過したもの、又は助詞「て」を、助動詞「ず」と同義に解した者が少くない。

『解釋は文法を頭において』（高松高商）

左ノ文章ヲ解釋セヨ
(一) 世の中の人のあらまほしきは實心になんありけるそは萬の道を學ぶにこれかれの人の同じ師に就きていそしむ年月同じほどなるにうまく其の道を得ると得ざるとのけぢめこよなきは大方心のまめなるとさしもあらぬとによりてなりけりさるは師もその人のまめ心を見得てなん心得がてなるふしをもねもごろにときさとすものにはありける

【講評】
この問題に對する答案の闕點の重なるものを拾つてみると、文法の智識が足らぬ爲に解釋を誤つたかと思はれるものが多い。
(イ) 世の中の人のあらまほしきは實心になんありける
此のありけるのけるを過去又は推量の助動詞と見たか
○世間の人にありがちなは誠の心でありました。
○世の中の人の有りたい事はすこやかな心を持つてゐることであらう。としたり

（ロ）師もその人のまめ心を見得てなん心得がてなるふしをねもごろにときさとすものにはありける

のなんを、終のありけるに對する係詞と氣附かず

○先生もその人の勤勉なる心を見拔いたでありませうか

○先生も眞面目な人の誠意さを御認めになつたでありませう

とかいふやうに、こゝで文脈の切れたものとして解したのが多かつた。

解釋には文法を頭において筆を下して貰ひたい。

『助詞に敏感なれ』（松本高校）

國文では、いつも助詞がデリケートな役目をつとめて居るのだから、助詞をいいかげんに見ては、角な座敷を圓く掃くやうな、しあげの拙い解釋しか出來るものではない。次の問題についても

「道とはすれど」の「は」

「知られざるをも」の「も」

「しるしもするが」の「も」

などに對して、さして注意を拂はず、省略して解釋したものが多數であつた。

（一）およそ書を見るには知れるを知れりとし知らざるを知らずとするを學問の正しき道とはすれど知られざるをもかにかくおもひはかりて知らむとするは學者の志なればそをつばらにおもひあきらめ知るはむねとすべきことといふべしまた知りえたらばその知りえたることを明かにしるしもするが學びの道なり（　）わきまへもせでみだりにさなりとしるすは後の人をはばからずとこそいふべけれ。

（注意）右ノ文中（　）ノアルトコロニ前後ノ意味ノツナガリヲヨクスル語句ヲ補足シテ解釋セヨ

『そんな間違は出來ない筈である』（廣島高校）

（國文解釋）（文・理）

左ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ。

（一）人に向ひていふ言葉はこまやかなるもいひつぐたびにあやまりもし年へてはうせゆくをふみの言葉はももちの人にうつりてもいささかも違ふふしなく事はさらなり心をさへ傳ふべければ筆とる人はすぢさだかにわかれて人のよく心うべきやうに書かなむ

【解　説】

「こまやかなるも」の「なるも」を正解し得たものは極めて少數であつた。多くは「であつても」「であるけれども」「であるものの」の如く譯してゐた。近頃の人の書いた文章の中には、そのやうに解すべき場合が多く、殊に「であつても」の如きは文法許容案でも許容されてゐるやうであるけれども、それはしかし變則的な用法であることを知つておいて貰ひたいと思ふ。

「事はさらなり」を、上の「いささかも違ふふしなく」につづけて、「少しも違ふやうな點の無いことは勿論である」といふ風に解したものが、なか〳〵多かつたが、文章構造をよく見たら、そんな間違は出來ない筈である。

「書かなむ」の「なむ」の如きは、中學あたりでも十分注意されてゐる事と思ふが、それにもかかはらず、「書くだらう」としたものが非常に多かつた。又、「書きたい」としたものも多かつたが、未然形につづく「なむ」は願望の意を示すといふことだけ知つて、「他に對する願望」といふところまでは理解が徹底してゐない結果であらう。

『採點上注意を拂つた事項』（大分高商）

◎句切〳〵が的確に了解されてゐるか否か。文章の各語句が、文章構成上より見て、主部の役目をつとめてゐるか、補部の役目をつとめてゐるか、將又、述部としてのはたらきをなしてゐるか否かなどを篤と見てゐるかどうか。

◎答案中の文章の假名遣が正しいか否か。

字音假名遣を決定されてあるとほりに正確にすることはなか〳〵困難であるとしても、せめて活用語の假名遣は誤らない樣にしたいものである。然るに本年の國語の答案中には

「見エル」を……「見ヘル」

「オク(置)を……「ヲく」

「サヘギル」を……「サエギル」

「恥カイタ事がナイ」を……「恥カイタコトガナキ」

といふ風に認めてあるものが幾つもあつた。

また

「うべなひ給はじ」を普通の語では「承諾ナサルマイ」と、助動詞の「じ」は、未來を推量して打消をなす意味であるのに「承諾ナサラナイ」と斷定的に說いてあり、

「罪を得るわざなめり」は「罪ヲ作ルコトニナルラシイ」とし、「めり」は物事の狀態を「然り」と推量していふ言葉であるのに、之を單に「罪ヲ作ルコトデアル」と斷定して說いてあるのが多い。これは語法上の智識を克く把握してゐない證據である。

『文法の必要』（七高）

凡そ文章の解釋上、文法の地位は相當重要なるものにして、多樣に解釋の意見が分かれたる場合も最後の斷定は文法に待つ外無きものなれば、平素國文講讀の上に於ては、教授者は隨時隨處、十分練習の必要あるを認む。

『恥辱である』（六高）

國文法は決して英文法以上にむづかしくはない。たとひむづかしいとしても國文法が十分にわからぬといふことは中等教育を終へようとする者にとつては恥辱であらねばならぬ。文法は間違つてゐても用は達しられるといふことは、正式な教育を受けたものの言へない所である。

これを要するに、國文法の學習を十分にしておくと否とは、受驗生の運命を左右するわかれみちであるといへる。

三　文法飽くまで學ばざるべからざる理由

徳富蘇峰氏は一世の文豪である。しかし氏の書く文章の中には、しば〳〵

「さう思う」

といふやうな間違つた假名づかひが見受けられる。この人ほどの文豪すら左樣な間違をして平氣で居られる以上、假名づかひなどといふことは、それほど歴史的傳統を重んじなくてもいいではないか。時代の一方にはローマ字論の火の手さへ旺んにあがつてゐる。發音のとほりに書いたらよいではないか。苦しんで假名づかひなど正確にする必要がどこにあらう。かういふのも、一應もつともである。しかし國語・文法の問題中には普便假名づかひの問題がいかに多いか。「さう」「やう」「よう」「らう」「ございます」「いらつしやる」「ありがたう」「しまふ」「かういふ」といふ類の問題が、どんなに澤山入つてゐるか。

忙しい勉強に追はれながら、かう考へて思ひなやむ受驗生がかなりあることであらう。

更に受驗解答號など見ると、どうであらう。

昭和九年度の東京女子高等師範學校の問題中に

お嬢樣　さあ　早く　おやすみ遊ばせ

といふ文章について文章法上の成分を言はせるのがある。この「さあ」は獨立語でなければなるまいが、「受驗と學生」の正解號を見ると、副詞的修飾語となつてゐる。

正解號などに執筆する人なら、文法の問題を作る位の實力をもつて居るに相違ない。それであるのにどうしたといふんだらう。そんな例ならいくらでもある。助動詞を拔き出して活用表を作れといふ問題中の

御存じでせう

といふのを、正解號では

でせう	○	○	でせう	○
				○
				○

としてゐる。これは

でせう	でせ	でし	です	○
				○
				○
				○

といふ二つの助動詞ではないか。そんな先生方が間違ふほどのことが、どうして我々にやつて行かれよう。かう言つて、文法のうるささを歎く人もあらう。

昭和十一年度京都府立醫科大學豫科の問題、方文記中の一節、

又知らずかりのやどり誰が爲にか心をなやまし何によりてか目をよろこばしむるそのあるじとすみかと無常を爭ふさまいはばあさがほの露にことならず

といふ文中の「その」は何にかかつてゐるかといふのに對して、三つの雜誌が三つの答を示してゐてくれる。

「その」は　かりのやどり　をさす　（考へ方解義號）

「無常を爭ふ」さま　（受驗戰全解號）

「その」は「無常を爭ふ」にかかる　（受驗と學生正解號）

一體どれがいいんだらう。ああ、頭が重くなる。かう言つて、文法嫌ひに拍車をかける人もゐるであらう。

更に昭和十一年度第一高等學校の問題

この書物は一度讀んだ(1)ことがあるやうだが(2)、さうでない(3)かもしれ(4)ない(5)。

この傍線のある語の品詞と文法上の意義とを答へよ。といふのに對して

だ(1)
- 助動詞　過去を表す　（考へ方）
- 助動詞　過去の意　（受驗と學生）
- 助動詞　指定を表す　（受驗戰）

ない(3)
- 助動詞　否定を表す　（考へ方）
- 形容詞　打消の意　（受驗と學生）
- 形容詞　「あり」の陳述の意の反對で「無い」である　（受驗戰）

といふやうに、それ〴〵違つてゐる。活字の間違かしら。それにしても、こんな厄介な、わかつたやうでわからぬ學問があるのかしら。かう言つて落膽する人があるかもしれない。

本當にこれは困り者である。それほど迷路の多い學科では、中等學生が相手にするには不向であらうと言つてくれるお父さんがあるかもしれない。

雜誌だからゴタ〴〵するのも無理は無いかもしれぬが、昭和十年度府立高等學校の問題中の一節に

ただなる時こそ狂言綺語もまじらめ　今はとあらむ時だに心のまことにかへれかし

一般ニ「だに」トイフ助詞ニハ、意味ノ輕イモノヲアゲテ言外ニ他ノ重イモノヲ推シテ知ラシメル意味ガアル。コノ文デハ何ヲ何ニ對シテ「だに」ト云ツテキルノカ

といふのがある。どうもわからん。ところが文法書をあけてみると、この「だに」といふ助詞に對して

口語ノ「なりと」ニ當リ、ソレト限ツテ他ヲカヘリミナイ意ヲ表ス

といふ説明もある。この説明をこの問題のあとにおいてみた方が合點が行くが、問題が間違つてゐるのではあるまいか、さてどうしたものであらう。

かにもかくにも、國文法といふものが、これほど厄介な、こうるさい姿をあらはして來ると、受驗生だつて厭になるのも無理はない。

第二高等學校の先生が、昭和十年度の講評中に、

文法ニツキテハ學界ノ過渡時代トシテ、成ルベク文典ノ體系ニ觸ルルモノヲ避ケ、實用ニ關スル部分ヲ試問スベキモノト信ズルガ故ニ、年々コノ主意ノ下ニ出題シテ居ル。

と言つてゐるのは、餘り小面倒な細かな問題はやめてといふことであらうが、その翌十一年度の同校問題に、文中の活用語の活用を記させるのがあるが、その中に「し」といふのが一つある。ところがその文中「し」の用ひられてゐるのは、「ととのはすして」「治らすして」「榮えすして」「道にして」といふやうに活用語でない場合なので、受驗生もびつくりしたらうが、かういふ場合の「し」は「し・て」の合した一語で助詞と認められてゐる。從つて活用はしないことになるのであるが、強ひてさせればサ行變格であるといふことになる。これはどうしたことか。

かうあげて來てみると、國文法が受驗者にとつて厄介なものであることがわかるのであるが、こんなことで國文法が入試界から斥けられようとも思はれぬ。殊に國文解釋の正確な答案は、文法の力が無くては出來ぬと、講評中にもしば〳〵繰返されてゐるのであるから、今後はます〳〵重んじられて行くかとさへ考へられる。全國中學校長協會でも、

高等商業、高等工業、外國語學校、醫學專門學校等には文法を課してゐないのが多いが、なるべく文法を課するのが適當である。特に外國語學校等には是非加へられたい

と建議し居る位である。

「さうでないかもしれない」の「ない」がどう違ふかといふやうな問題になると、かなりうるさいが、根本的な基礎的な部分に對してまで、氣を腐らせてかかるのは嘘である。動詞の活用がわからぬとか文の主語が見出せないとかいふことでは、受驗戰士としてまことにたより無いものであると言はねばならぬ。

工事中ニツキ御注意願ヘマス

道惡シクバ行ケベクモナシ

この程度の文の誤は、明快に訂正出來るやうでないといけない。歴史の答案の中にでも、「そうでなる」とか「英雄出でづんば」とか書いてゐたのでは、減點されることは當然覺悟してかからねばなら

ぬ。文法を投げてかかることを單に文法の得點だけを捨てることだと考へてゐたら、全くの誤解である。

四　勝利への確實な近道

國文法を試驗問題に課してゐない學校の方が多いことは事實である。しかし國語の無い學校は至つて少い。ところがその國語なるものが、實は國文法の問題と餘りちがつてゐないものが多いのであるから、國文法を必要としない學校は殆ど無いといふことになるのである。

例へば弘前高等學校の昭和九年の國文解釋問題中に

あすはあふみといひけむは……

といふところがあるが、之に對する講評に

「**けむ**を本義に解し得たるものは甚だ稀に、大方は單なる過去の辭と解したり。これもとより恕すべし。これを「いふのは」「いふが」などとせるもののありしは、全然出放題なり」

と言つて居る。新潟高等學校の九年度に

げにしくものもなき夜のさまになむ

といふのがある。之に對する講評は、

この「**なむ**」を推量又は反語として取扱つたものが多いのは文法的知識の缺乏を物語るものである。

といふのである。これらはもとより一例にすぎず、すでに「この聲に聽け」の中にもさん〴〵言はれて居ることであるが、國文の答案を調べるほどの先生たちは、常にさうした助動詞や助詞に對する解釋を、採點の急所としてねらつて居るのである。國文解釋は、他の學科とちがつて、とにかく何か書かぬ者は無いのであるから、問題にとりついて何事か書いて歸れば、出來たやうな氣がして居る者が多い。出來たと思はぬまでも、どこが出來なかつたか明瞭に自覺出來ない者が多い。小さな助動詞や助詞の取扱がいかに大切であるかを考へてゐる者は、ごく少いと言つていいだらう。從つて得點は受驗生の氣のつかぬ部分でき大な差を作つてしまつて居るのである。

國文法が嫌ひだといふことは、決して諸君がなまけ者であるといふ證據にはならぬ。現在の國文法には、嫌はれる筈だと思はれるやうなフシ〴〵がいくらもある。しかし厭な部分を見て全體を捨ててかかつてはならぬ。誰もが嫌ふやうなものに少し多くの努力を拂へば、それによつて得點の差を大きくすることが出來るのであるから、今後の受驗戰において勝利を得るの確實な近道は、國文法上の知識を確實にすることである。金儲の上手な人は、他人の捨ててかへりみぬやうなものに目をつけるといふ。これは俗なたとへかもしれぬが、國文法に著目すると否とによつて、諸君の浮沈はきまるであらう。

五　各校國文法問題とその解答及び各校教授講評

散る花をのせてかへりぬ渡し舟むかひの岸に人はおろして
さきに行く人ちひさくも見ゆるかなこの川橋の長さ知られて

右　明治天皇御製にツキテ其々ノ文主ヲ指示シ兼ネテ傍線ノ語ノ活用ヲ示セ　（二高）

文主。（渡し舟）
文主。（長さ）

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
散る	散り	散る	散る	散れ	散れ
のせ	のせ	のす	のする	のすれ	のせよ
かへら	かへり	かへる	かへる	かへれ	かへれ
ぬ	ぬに	ぬぬ	ぬぬる	ぬぬれ	ぬね
おろし	おろし	おろす	おろす	おろせ	おろせ
行く	行き	行く	行く	行け	行け
ちひさく	ちひさく	ちひさし	ちひさき	ちひさけれ	
見ゆる	見ゆえ	見ゆゆ	見ゆる	見ゆれ	見ゆえよ
知ら	知り	知る	知る	知れ	知れよ
れ	れ	る	る	れる	れよ

（四）あるゝかと見ればなぎゆく海原の浪こそ人の世に似たりけれ　（二十點）

右、傍線ヲ加ヘタルモノノ活用ヲ示シ、又、コノ歌ノ文主（主語）ヲ擧ゲヨ。　（二高）

文主。（浪こそ）

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
あるる	れ	る	るる	るれ	れよ
なぎ	が	ぐ	ぐ	げ	げ
似	に	にる	にる	にれ	によ
けれ	けら	けり	ける	けれ	

【講評】

文法につきては學界の過渡時代として成るべく文典の體系に觸るるものを避け、實用に關する部分を試問すべきものと信ずるが故に、年々この主意の下に出題して居る。

十年度問題の語の活用、及び文主の指摘は問題の性質上相當の成績を見たれど、中に一語の活用をも述べ得ざりし者若干を見出したるは、中學四年終了者として驚かざるを得ず。

ひとり〳〵に生れひとり〳〵に動くさるからに

人皆おのづからまゝならむ事をもとむるこゝろありさばれ家におひ世に立ち國を相成す從はざれば家とゝのはずして相背き讓らざれば世治らずして相侵し事へざれば國榮えずして禍家に及び身にいたるいまだ國やぶれ世亂れてわが身のまゝならむものはあらず、この故によく國に事へよく人に讓りて世治り家整ひ身もまた榮ゆるを知りておのがじしおのれをまげて人にしたがふをつとむるはみづから治むる道にしてまたまゝならむとする道なり。（二十五點）

右ノ文中ニ使用セラレタル左記ノ語ノ活用ヲ示セ。（二十點）

おひ。事へ。やぶれ。したがふ。し。（二高）

おひ。ヒ、ヒ、フ、フル、フレ、ヒヨ、（ハ行上二段）

事へ。ヘ、ヘ、フ、フル、フレ、ヘヨ、（ハ行下二段）

やぶれ。レ、レ、ル、ルル、ルレ、レヨ、（ラ行下二段）

したがふ。ハ、ヒ、フ、フ、ヘ、ヘ、（ハ行四段活）

し（？）

しは文中してといふ筒所にのみ使用されてゐるが、しては一つの助詞として取扱ふが常である。從つて活用は無い。しかし元來「して」といふ意味から出た語であらうから、「し」のみの活用をあげておく。サ行變格動詞であるから、

セ、シ、ス、スル、スレ、セヨ

である。けだし妙な問題である。

左ノ文中誤アラバ傍線ヲ以テソノ箇所ヲ指摘シ且點線ヲ施セル部分ヲ解釋セヨ

年壽は時ありて盡き、榮樂はその身に止まる。二者は必至の常期にて、未だ文章の無窮なるに如かずと。幾多詩人の中には强ち人を驚かそうとはせず、或は之を喜ばしめやうとし、或は之を別乾坤に導かうとするもあろうが、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くした時、誠に大勝利を得たように喜んだであろう。（大阪高校）

驚かそうとは
喜ばしめやうとし
あろうが
得たように　あろう

猿よ。お前は一體泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐるのか。お前の顏は悲劇の面のやうで、同

（一）一體（副詞）
（二）お前（代名詞）

時に又喜劇の面のやうだ。私の記憶は緣日の猿芝居へ私を連れて行く。櫻の釣枝・張子の鐘・それからアセチリン瓦斯の神經質な光。お前は金紙の烏帽子をかぶつて、絣鹿子の振袖をひきづりながら演技するのである。私の胸に始めて疑團が萌したのは、正にその演技中のお前の顏へ、偶然の一瞥を投げた時だ。お前は一體泣いてゐるのか。それとも亦笑つてゐるのか。猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。私はお前程巧妙なトラヂツクコメデアンを見た事がない。——私の心の中で斯う呟くと、猿は突然身を躍らせて、私の前の金網にぶら下りながら、癇高い聲で問返した。「ではお前は？　え、お前の其のしかみ面は？」

右ノ文章中ニアル左ノ詞ヲ別紙ニ書キ拔キ、且ソノ下ニソノ屬スル品名詞ヲ記セ。

(一)一體　(二)お前
(三)ながら　(四)だ
(五)巧妙な　(六)ない
(七)癇高い　(八)た

(三)ながら　(助詞)
(四)だ　(助動詞。)(指定)
(五)巧妙な　(助動詞。)(指定だの連體形)
(六)ない　(形容詞)
(七)癇高い　(形容詞)
(八)た　(助動詞)(時の過去)

(傍線ある(イ)(ロ)は解釋の部分である)

(五)巧妙な　(六)ない
(七)癇高い　(八)た
(例)(一)花(名詞)
(二)咲く(動詞)

(成城高校)

人のものを問ひたるに、知らずし(イ)もあらじ、ありのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。また(ハ)まことに知らぬ人もなどかなからむ(ホ)。うらゝかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし(ヘ)。

右ヲ讀ミテ左ニ答ヘヨ。

(1)全文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ。

(2)(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)ノ品詞ハ夫々何カ活用アラバソノ活用形ヲ示セ。

(成城高校)

(イ)し(助詞)
(ロ)をこがまし(形容詞。終止形)
(ハ)また(接續詞)
(ニ)など(副詞)
(ホ)なから(形容動詞。未然形)
(ヘ)な(助動詞。(完了)未然形)

(活用あるは(ロ)(ハ)(ホ)(ヘ)であるが活用形は表にゆづる)

（一）左ノ文中動詞ニ傍線ヲ施シ且ツ其レガ何活用ナルカヲ記セ。

やゝ深更に及んで、ほど遠く人の叫ぶ聲しけり。供奉の人々は聞きもつけられず。主上はきこしめして、「あれは何者ぞ、見てまゐれ」と仰せけり。（七高）

及ん（及ぶ。ハ行四段）。叫ぶ（バ行四段）。し（す。サ變）。聞き（聞く。カ行四段）。つけ（つく。カ行下二段）。きこしめし（きこしめす。サ行四段）。見（見る。マ行上一段）。まゐれ（まゐる。ラ行四段）。仰せ（仰す。サ行下二段）

【講　評】

「聲しけり」の「し」のサ變動詞たるを知らざる者多し。

「仰す」をサ變とし、或はサ行四段とする者多數あり。

「きこしめす」をサ變とするものも亦相當多し。

「見」を「ミ行一段」とせる珍らしきものも二三見受けたり。

（一）文法上誤アラバ正セ。（理由ハ不要）

イ、開闢より以來かゝることあるべくとも覺へ

（イ）

あるべくとも覺へず神助の程こそ有難しと東天に向いてしばし祈願をこめられける（或は祈願をぞこめられける）

（ロ）

ござゐます

あそこにいらつしやる（これは正しい）

考へやうによつてはそうも言へやう

【講　評】

文法の問題は主として假名遣及び係結の誤を訂正することを求めたので、その成績は惡い方ではなかつた。勿論中には、「覺へず」「ござゐます」「考へやうによつては」等として出されてゐる箇所を、「覺へゞ」「覺へじ」「ござひます」「考へようによつてわ」などとしたものも若干あるにはあつたが。

いささか意外に感じたのは「祈願をこめられける」を「祈願をこめられけり」と直すものは多いが「祈願をぞこめられける」と「ぞ」を入れた答案の少いことである。

それから、出された問題は何れも誤があると思ひこむためか、「あそこにいらつしやる」を「あそこにゐらつしやる」としたり、甚だしきは「あそこにゐらつしやます」「あそこにゐらつしやい」などとするにいたる。これらは「文法上ノ誤アラバ」の意すら解し得ないと言はれても辯解の辭が無いで

あらう。かかる不注意はかなり多く見られた。

左ノ各項中傍線ヲ施セル假名ニ漢字ヲ宛テ、文法上誤アラバ正セ（理由ハ不要）

征韓論のふつとうはおうべいじんのあつばくにたいするはんばつが、方向をかへたものと云える。

（誤アルモノダケヲアゲテオク）

云えるる。

ししい殿のむねに、夜な〳〵えもいはぬ聲ぞきこゆなり。（七高）

聲ぞきこゆなりる。

（なりがきこゆの終止形についてゐる。やゝ感動の意を表す形）。

左ノ川柳及ビ狂歌ノ中ノ助動詞ヲ擇出シテ其ノ種類ト活用トヲ表示セヨ

（イ）よいとこへ來たと、丈高つかはれる。

（ロ）あらそはぬ風の柳の糸にこそ堪忍袋ぬふべかりけれ（水戸高校）

（イ）來たと（口語。完了の助動詞）つかはれる（口語。受身の助動詞）

（ロ）あらそはぬ（打消の助動詞）ぬふべかりけれ（べかりはべくありであつてこのべくは適當の意を示す。けれ（けり）は過去を表し、また感動を表す。こゝは感動）

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
た	たら	た	た	たら	
れる	れ	れる	れる	れれ	れろ
べかり	べから	べかり	べかる	べかれ	
けれ		けり	ける	けれ	
ぬ	ず	ず	ぬ	ね	

一、左ノ歌文中ノみノ異同ヲ說明セヨ。

春深み越路をさしてかへる雁雲のうすみに今ぞ鳴くなる

頃はみ冬立つ初めの定めなき空なれば降りみ降らずみ時雨もたえず。

二、敬相（敬語尊敬）ノ口語助動詞ヲ列擧シテソノ活用ト例トヲ示セ。（三高）

一、春深み（形容詞深しの語根について、のでといふ意味を表してゐる接尾語）

うすみ（形容詞うすしの語根について名詞をなしてゐる接尾語）

み冬（接頭語。單に語調を添へるもの）

降りみ降らずみ（動詞や助動詞について、反對の事柄が交互に行はれることを表す一種の接尾語）

二、

れる（レ、レ、レル、レル、レレ、○）

心よく話される。

られる（ラレ、ラレ、ラレル、ラレル、ラレレ、ラレヨ）よろしいと仰せられる。

ます（マセ、マシ、マス、マス、マスレ、マセ）

おいで下さいますれば御待ちいたします。

（總點四十）

（一）打消の助動詞を列擧してその異同を說明し併せてその活用表を示せ

（二）左の文中の助動詞に傍線を施しその意義と何形に用ひられたるかとを記せ

（イ）手のうるはしからむこそいとあらまほしきわざなれ

（ロ）先生ガ筆ヲ取リニ行カレマシタ（三高）

一、

文語

ず（斷定的打消の意）

ざり（ず　ありの意で、下に他の助動詞の來る場合には必ず用ひられる。行カザリキ。）

じ、まじ（共に推量の意をもつた打消。又決意を示す場合にも用ひる）

口語

ぬ、ない（文語のずにあたる）

まい（文語のじ　まじにあたる）

（活用表は略す）

二、

（イ）うるはしからむ（推量、連體形）わざなれ（指定、已然形）

（ロ）行カレ（尊敬、連用形）マシ（尊敬、連用形）タ（過去　終止形）

一、次ノ各問ニオケル動詞又ハ形容詞ト、助動詞又ハ助詞トノ接續ヲ簡單ニ說明セヨ。

（イ）ここにをられし人
　　ここにゐられし人

（ロ）筆を用ゐて書く
　　筆を用ひて書く

（ハ）花多かれども
　　花多けれども

（ニ）著物を著させよう
　　著物を著させよう

一、

（イ）
- 動（ラ行變格、未然形）をら
- 助動（尊敬、連用形）れ
- 助動（過去連體形）し（をらの終止形はをり）
- 動（ワ上一段、未然形）ゐ
- 助動（尊敬、連用形）られ
- 助動（過去連體形）し（ゐの終止形はゐる）

（ロ）
- 動（ワ行上一段、連用形）用ゐ
- 助、動（四段活終止形）て　書く（用ゐの終止形は用ゐる）
- 動（ハ行上二段、連用形）用ひ
- 助て　書く（用ひの終止形は用ふ）

（ハ）
- 形容動詞、已然形）多か
- 助、れども（多かれの終止形は多かり）
- 形（ク活）已然形）多け
- 助れども（多けれの終止形は多し）

（ニ）
- 動（カ行上一段、未然形）著
- 助動（使役、未然形）させ
- 助動（未來）終止形よう（著の終止形は著る）
- 動（サ行下一段）著せ
- 助させよう（著せの終止形は著せる）

（ホ）
- 動（ザ行變格、未然形）案ぜ
- 助動、（自然可能）られる（終止形）
- 動（ザ行上一段）未然形）案じ
- 助られる

（注意）サ行變格の中でザ行に活用するものはザ行上一段にも活用する。「信」「重」「案」「感」「封」等。

せ、	し、	す、	する、
シ、	シ、	スル、	スル、
セ、	シ、	スル、	スレ、
ジ	ジ	ジル	ジル
ジ	ジ	ジル	ジレ

すれ、せよ（文語サ變）
セヨ（口語サ變）
シロ（口語ザ上一）
ジロ（口語ザ上一）

（イ）
- 獨立語　友よ
- 主語　父上は
- 客部　君の卒業する日を
- 補部　指折り數へて
- 述部　待ち居給はん

（ロ）
- 獨立語　二月十一日
- 獨立語　國民は
- 補語（修飾語）　誰でも
- 主部　このめでたい日を祝はぬ者は
- 述語　無い

二、左ノ文中傍線ヲ施セル「文ノ成分」ノ名ヲソノ右側ニ記セ

（イ）友よ　父上は　君の卒業する日を　指折り數へて　待ち居給はん

（ロ）二月十一日　國民は　誰でも　このめでたい日を祝はぬ者は無い　（三高）

左の文を解釋し、且つ、傍線を施したる箇所の活用する語を摘出して、其の活用を表示せよ。

歌は文とはいたくことにして詞のまゝにこゝろえてはたがへるあとさきにいへるはじめに詞をあまたそへざれば心えがたき又ふかきこゝろをいへるものなれば世のつねのことわりにたがひていと〳〵おろかなる事いへるをさるかたのことわりにこゝろうべきなどくさ〴〵ときやうあり。

（高知高校）

左の文中、傍線を施せる箇所の文法的差異を記せ

（三十點）

いと〳〵おろかなる事いへるをさるかたのことわりにこゝろうべきなどくさ〴〵のときやうあり

	未然	連用	終止	連體	已然	命令
おろかなる	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
い	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
る	ら	り	り	る	れ	
こころう	え	え	う	うる	うれ	えよ
べ	べく	べく	べし	べき	べけれ	れ
あ	ら	り	り	る	れ	

（一）

イ、ふるさとそぞろにしのばれて、いとも露けき秋にぞありける。

ロ、用事をはれるものは早く退出して、他人に迷惑をかくな。

ハ、あすの榮えを願へばこそけふのなほざりは許されね。

ニ、掃除坊主は罪もなく蜂にさされて、賴む御堂の蔭もうらめし。

ホ、師のとぶらはれし情の深さは、たゞひし家づとの數々よりも嬉し。

（二）

イ、昔のすみかは跡もとどめず人訪はぬ野らと荒れ果てたり。

ロ、都のつはものは鬼つて引き返しぬ、正行が軍のあまり强きに。

ハ、をさなごのまぬとしはなけれども、なほ親

一、

（イ）自發的可能の助動詞「る」の連用形

（ロ）動詞「終る」の已然形の語尾

（ハ）可能の助動詞「る」の未然形

（ニ）受身の助動詞「る」の連用形

（ホ）敬語の助動詞「る」の連用形

二、

（イ）打消助動詞「ず」の連體形

（ロ）時の完了の助動詞「ぬ」の終止形

（ハ）動詞「まぬ」（まねをすること）の終止形

には似るものなりけり。

（三）

イ、誰があさましく木の實とりしか、仰ぐもさみしき空となりぬ。

ロ、昨日こそ早苗とりしか、いつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く。（高知高校）

三、

（イ）時の過去の助動詞「き」の連體形「し」に、疑問の助詞「か」が附いたもの

（ロ）「こそ」を受げて、過去の助動詞「き」の已然形「しか」で結んだもの。

の語尾。ナ行下二段活用。

【講評】

第一問

五つを通じて概說すれば無解答のものが、（ロ）（ハ）に最も多く、（イ）にもかなりあり、（ニ）（ホ）にも少々ある。滿點も二十名ばかりあるか、零點も百名ほどあつて、半ばぐらゐが大部分であり、出來は惡い方である。

（イ）は、約三分の二は品詞を助動詞としてゐるが、殘りの三分の一は下二段活用の動詞「しのばる」としてゐる。助動詞としてゐる者も、種類を「自然の可能」とか「自發」とかしてゐる者は少くて、「可能」として居るものが最も多く、「受身」としてゐるものが之に次いで多く、「推量」「使役」「詠歎」などとしてゐる者もかなりにある。活用形も約三分の二は連用形としてゐるが、已然形としてゐる者も多く、未然形や連體形にしてゐる者もかなりにある。

（ロ）動詞「終る」語尾の「れ」と見てゐるものは、まことに少くて、大部分は助動詞とし、而も種類は「時の完了」と考へたものが多い。動詞「終る」に見てゐる者も、活用形を已然形としてゐるだけで、その語尾であることを記してゐないものが大部分である。

（ハ）助動詞の受身と見てゐるものが多い。又、品詞を「許さる」といふ下二段活用動詞としてゐるものが相當多數である。

（ニ）これは受身としてゐるものが多い。品詞を「ささる」といふ動詞としたものがかなりある。

（ホ）これも「とぶらはる」といふ動詞と見たものが少々ある。

要するに次のやうな通弊がある。

（1）漢字書きの品詞にのみ馴れてゐて、假名書きのそれに親しむことが足りない。

（2）語根と語尾との觀念が徹底してゐない。

（3）助動詞の、動詞助動詞に接續する活用形の知識が不十分である。殊に時の完了の助動詞「り」が大切である。

問題（二）（三）

やはり出來ないのが多い。解釋問題などとちがつて、表現上の巧拙など殆んど無いものであるから滿點をとることもさしてむづかしくはない。しかし毎年滿點よりも零點の方が多い。本年の分を分科別にすると次の如くである。

文科	滿點 十二名	零點 四十八名

理　科　二十二名　三十五名

理科志望者の方が遙かに優秀であるのは一見奇異に見えるが、むしろ當然のことと思ふ。それは文科のものは一般的に興味中心主義であるから、學科においても、えりぐひをする。之に反し理科のものは概して所謂眞面目である。此の相違が右の結果を生んだものと信ずる。

單に文法のための文法ではない。國語を正しく解し正しく綴ることがむしろ本領なのである。實科的に考へても、文法は中等學校教科書を精讀しておけば、たやすく滿點がとれるのだから、受驗者にしても文法をないがしろにするなどは愚の骨張である。

次ノ歌ニツキテ左ノ問ニ答ヘヨ。

燒かずとも草は萠えなむ春日野をただ春の日に任せたらなむ

（イ）活用する語を摘出せよ

（ロ）摘出せる語の品詞の名を記せ

（イ）燒か。ず。萠え。な。む。任せ。たら。（以上活用語）

（ロ）燒か（動詞）ず（助動詞）萠え（動詞）な（助動詞）む（助動詞）任せ（動詞）たら（助動詞）（注意）最後の「なむ」は助詞。

（八）摘出せる語の活用を活用形の名に記して表示せよ。

（ニ）摘出せる語の活用形の名を記せ　（高知高校）

（八）

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
燒か	か	き	く	く	け	け
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
萠え	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
な	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
む			む	む	め	
任せ	せ	せ	す	する	すれ	せよ
たら	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

（ニ）燒か（未然形）ず（終止形）萠え（連用形）な（未然形）む（終止形）任せ（連用形）たら（未然形）

次ノ文中ノ傍線ノアル語ノ品詞ヲ問フ。

宿命的に感傷主義に貫かれた日本の作家達が理論を輕蔑して來た事は當然である作家が理論を持つとは自分といふ人間がこの世に生きて何故藝術製作などといふものを行ふのかといふ事について明瞭な自意識を持つといふ事だ少くともこれの紛問に强烈な關心を持つ事だ言はば己の作家たる宿命に關する認識理論をもつ事である。

次ノ文中ノ係結ニナツテヰル箇處ヲ取出シテソノ法則ヲ說明セヨ。

何事も古き世のみぞしたはしき今樣はむげにいやしくこそなりゆくめれかの木の道のたくみの作れる美しきうつはものも古代の姿こそをかしと見ゆれ文の詞などぞ昔の反故どもはいみじきたゞいふ詞も口惜しうこそなりもてゆくなれ。

（姫路高校）

動詞　貫か
助動詞　れ
助動詞　た
副詞　何故
形容動詞　明瞭な
助動詞　だ
助動詞　たる

係結

古き世のみぞ　したはしき
いやしくこそなりゆくめれ
古代の姿こそをかしと見ゆれ
文の詞などぞ昔の反故どもはいみじき
口惜しうこそなりもてゆくなれ

（法則の說明を略す）

【講評】

語形態に對する觀念を見るために品詞調べを文の構造と併せて語の活用形態に關する知識を見るために係結の法則を問題とした。

「貫かれた」を一つの品詞として形容詞とし、

「何故」を名詞とし、

「明瞭な」を形容詞とし、

「だ」「たる」を助詞或は動詞

と見たのが共通的な誤といへる。語の單位についての觀念がはつきりとせず、品詞の區別が、語形態と共にその語の職能から決定せられることについての明確な智見の缺けてゐるものが、かなりにあつた。

第四問、係結の問題は、滿點と零點とが共に多かつた。白紙のままの、或は全く意味をなさない答案と、文法的に整然と說明の與へられてゐるものとが對立してゐた。

說明としては、單に、連體形・已然形で結ぶとのみでは不十分で、その連體形なり、已然形なりについての文法的な說明がほしいのである。

「したはしき」の「き」が過去の助動詞、

「めれ」の「れ」が受身の助動詞

「見ゆれ」の「れ」が「ゆ」の已然形と考へられてゐては困るからである。しかもかういふ答が、

一つの傾向を作つてゐた。

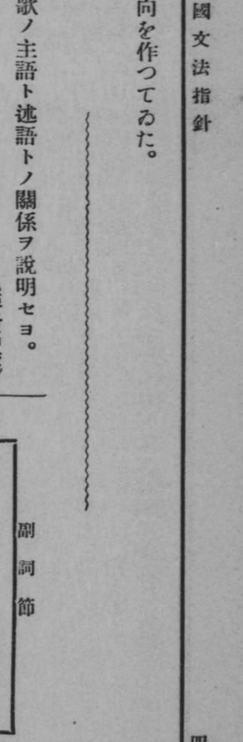
一、次ノ歌ノ主語ト述語トノ關係ヲ說明セヨ。（姫路高校）

月照らす上野の森を見つつあれば家ゆるがして汽車行きかへる

二、次ノ「なむ」ノ意義用法ニツイテ述ベヨ。

（1）高砂のをのへの櫻咲きにけり外山の霞たちずもあらなむ

（2）かたちこそみやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ



二、

（1）動詞「あり」の未然形について他に對する願望を表してゐる助詞。

（2）なり（動連用形）な（助動（完了未然形））む（助動（未來）終止形）

「なるであらう」といふ推量を表してゐる形。

（3）係詞となつてゐる助詞。ける（助動、連體形）で結んでゐる。

一、父君官命を帶び給ひて歐米に出張せらる。

二、「旅行せず」は確定的な打消であり、「旅行すまじ」は推量の打消である。

旅行せ（サ變未然形）ず（打消助動詞、終止形）

旅行す（サ變終止形）まじ（打消（推量）助動詞終止形）

（3）柿本人麿なむ歌の聖なりける

一、左ノ文ヲ敬語體ニ直セ

父官命を帶びて歐米に出張す

二、左ノ文ノ傍線ヲ施シタル部分ノ異同ヲ說明セヨ

彼は病氣の爲旅行せず
彼は病氣の爲旅行すまじ

（東京高等）

【講評】

出題の趣旨

（一）は敬語法の一般について正しく心得て居るかどうか。（二）は助動詞の用法について確實な意識を有して居るかどうかを驗する爲に選んだ。これらの問題は、むしろ平易すぎる位のものであるが、わざと課して、一面には中等教育における文法教授の効果如何を知らうと思つたのである。

（一）に要求した所は、「父」「帶び」「出張す」の三箇所を敬語體に直すことであつたが、この中で最も多く見落されたのは「父」で、「帶び」がこれに次ぎ、「出張す」は大抵直してあつた。しかし直したものの中にも

帶び給ひて出張し給ふ

帶びられて出張せらる

のやうに、前後に同じ敬語を用ひた者がかなり多かつた。これは誤といふわけではないが、用語に對する注意が足らぬことを示してゐるものである。

また原文を勝手に改めたものがあり、更に口語文に改めたものがあり、最も甚だしいものは候文に改作したものがあつた。

（二）の方は「ず」と「まじ」とは同じ打消の助動詞ではあるが、「まじ」には推量の意味のあることを知つてゐるかどうか、これが問題の要點であつた。が、「ず」については

現在の助動詞

斷定の助動詞

過去の打消

「まじ」については、推量の助動詞といふ答がすこぶる多く、その他に

未來の打消

疑問の意を含む詞

希望願望の助動詞

將來の行爲に對する決心意志を表す

などがあつて、恐らく本人も何を答へてゐるのかわからないだらうと思はれる。

一、副詞ノ定義ヲ述べ且簡單ニ文例ヲモ示セ

二、左ノ文ノ係結ヲ說明セヨ

（イ）月見れば千々に物こそ悲しけれ

（ロ）山里は冬ぞさびしさまさりける

（ハ）いかに誰かある

（東京高等）

一、副詞のところを見ること。例もそこにある。

二、

（イ）助詞「こそ」の係に對して形容詞「悲し」の已然形「悲しけれ」で結んでゐる。

（ロ）助詞「ぞ」の係を、助動詞「けり」の連體形「ける」で結んでゐる。

（ハ）「誰か」の「か」といふ疑問の助詞に對して動詞「あり」の連體形「ある」で結んでゐる。

【講評】

出題の趣旨

文法上の知識が確實であるか、又紛れ易い問題について異同の辨別力が有るかといふやうな點を檢するのを主とし、極めて簡單な問題を選んだのである。

（一）の要求に對して先づ定義の仕方が甚だしく不確實で、用語の上にも遺憾の點が多かつたやうである。例へば「副詞ハ動詞、形容詞ノ上ニオク」といつたやうな例が多々見受けられた。（下略）

左ノ文ノ成分ヲ吟味シ意義ノ異同ヲ說明セヨ。

（い）太郎　次郎と　三郎を　訪ふ。

（ろ）太郎と　次郎と　三郎を　訪ふ。

（は）太郎　次郎と　三郎とを　訪ふ。

（靜岡高校）

（い）太郎（主）　次郎と（補）　三郎を（補（客））　訪ふ（述）（太郎が次郎と共に）

（ろ）太郎と次郎と（主）　三郎を（補（客））　訪ふ（述）（太郎次郎二人で）

（は）太郎（主）　次郎と三郎とを（補（客））　訪ふ（述）（太郎が）

【講評】

この問題の成績を見るに、快して良好といふことが出來なかつたのは遺憾とする。先づ文の「成分」といふことを知らず、これを品詞に解剖したものもある。次に（い）と（ろ）とを全く同一意義なりと解したものも少くなかつたが、これらは助詞「と」の意義とその嚴密なる用法とを知らないものである。又、（ろ）は主語の省略で、太郎と次郎と三郎とがいづれも客語であると答へたものもかなりあつたがこれらは文における主語省略といふものが特殊の場合に限ることを知らず、且、本問の三つの文の比較を忘れたものである。

要するに受驗者の文法の力乏しく、殊に文章法の學習を怠つてゐることが、この試驗によつて知られた。

一、左ノ詩中ノ活用アル語ニ傍線ヲ施シ、且ソノ品詞名ト、コヽニ用ヰラレテヰル活用形ノ名トヲ記セ

名も知らぬ遠き島より
流れ寄する椰子の實一つ
故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月
もとの樹は生ひや茂れる
枝はなほ陰をやなせる

知ら（動詞。未然形）　ぬ（助動詞。連體形）
流れ（動詞。連用形）　寄する（動詞。連體形）
離れ（動詞。連用形）　生ひ（動詞。連用形）
茂れ（動詞。已然形）　る（助動詞。連體形）
なせ（動詞。已然形）　る（助動詞。連體形）

二、左ノ和歌又ヒ俳句中ノ主語（又ハ主部）ノ右側ニ線ヲツケヨ。尙節（句）ヲ含メルモノハソノ節（句）ノ主語ノ左側ニ線ヲツケヨ。

（い）箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

（ろ）清水の上から出たり春の月

（は）春の水山なき國を流れけり

（靜岡高校）

（い）箱根路を（主語）　わが（主語）　越え來れば（節）　伊豆の海や沖の小島に波の（主語）　よる見ゆ（節）

（ろ）清水の上から出たり春の月（主部）

（は）春の水山（主部）　なき國を流れけり（節）

【解　評】

（一）は活用ある語とその活用形とを問ふのであるが、活用形については、とかくただ機械的に暗記して、各活用形の意義や用法を知らないものが少くないのを慨き、特にこのやうな形式によつて問うたのである。

さてその成績は概ね良好であつたが、中には活用ある語といふものを知らないもののある如く、「より」「もと」「なほ」等の語に傍線を施したものもあつた。又、品詞と品詞との區別が明瞭でないものも見られた。特に、

「茂れる」「なせる」

を各一つの動詞と見たものの少くなかつたのは意外であつた。尚、「茂れる」「なせる」の「る」を助動詞と見た者の中でも、その連體形なるに氣づかず、終止形と答へた者もある。これらは係結「や」を見落したものであらう。（「る」を受身の助動詞と見たものとせば、そは論外である）

「知らぬ」の「ぬ」を終止形と答へた如きも、これを完了の助動詞と見た誤で、文法の知識の皆無に近きを示したものである。

「流れ」「離れ」「生ひ」を、各未然形と答へ、「寄する」を終止形と答へたものもあつたが、これらは活用形を單に形の上からばかり記憶して、その用法を知らないがための誤である。

「離れて」の「て」を助動詞としたものも少くなかつた。これは勿論その成立から見ると助動詞の連用形であるが、かういふ場合は、これを助詞と見るのが常である。

（二）の成績も概して良好。解答を誤つた者は、大抵文の主語なるものを全く知らないものと察せられるものであつた。尚、「節」（句）の吟味が疎かなために、「浪のよる」において「浪」を主語と指摘することを忘れ、或は「山なき」が「國」の修飾節たるに氣づかなかつたものもある。

かくのみ思ひくつしたるを心も慰めむと心ぐるし

思ひ（ハ行四段活用）。くつし（サ變）。慰め（マ行

がりて母物語などもとめて見せ給ふにげにおのづからなぐさみゆく源氏物語の一部を見てつづき見まほしくおぼゆ

右の文中より動詞を摘出してその何活用動詞なるかを記せ　（山形高校）

【評　評】

動詞の活用に關する知識程度を見ようとしたものである。從つて其の要求するところも寛大であると言はねばならぬ。然るなほ正解十分の五に達せざるもの（即ち五十點以下のもの）總受驗者の半數を占めて居ることは、文法教授の至難な事を思はしめると共に、一段の努力を要することを物語るものである。

下二段活用）。心苦しがり（ラ行四段活用）。もとめ（マ行下二段活用）。見せ（サ行下二段活用）給ふ（これは助動詞として用ひられてゐる。動詞としてはハ行四段活用）。なぐさみ（マ行四段活用）。ゆく（カ行四段活用）。見（マ行上一段活用）。おぼゆ（ヤ行下二段活用）。

一、左ノ動詞ノ活用形ノウチ未然形ト已然形トヲ記セ。

一、

植　得　居　往　強

植　得　居　往　強

二、次の連語に誤あらば其の誤れる部分を消して右側に正しき形を書け。

勉めり。　讀めり。
起きべし。　辱なふす。
覺ゆるらむ。　（山形高校）

【評　評】

（一）においては五十音圖「ア行」「ハ行」「ヤ行」「ワ行」の辨別についての的確さを見ようとしたものであるが、この成績は至つて芳しからざるものであつた。

（二）は動詞助動詞の連續、及び音便についての試問であるか、これは概して良好であつたといふこ

二、

	未然形	已然形
植	う　ゑ	ううれ
得	え	うれ
居	ゐ	ゐれ
往	いな	いぬれ
強	しひ	しふれ

勉めたり（りは四段とナ變にのみ附く）
起くべし（べしは終止形に。ラ變には連體形）
辱なうす（辱なくすの音便）
覺ゆらむ（らむは終止形に附く。ラ變には連體形）

とが出來る。

左ノ文中片假名ノ部分ヲ漢字ニ改メ、傍線ノ部分ノ活用形ヲ記セ

（活用形ニツキテハ次ノ如ク記載スベシ。朝早く起きました）連用

（福岡高校）

西行がかく輩出した歌人の中にあつて特に重きを爲す所以は何かといふに全くその天成の才とイウジヤク（　）なる歌風とにある西行の歌才がテンピン（　）であつてその作るところのいづれも自然にガウ（　）もジンキテウタク（　）の跡なきことは或は題詠にナヅ（　）み或はギカウ（　）を弄した當時の歌風からテウダツ（　）してその作の凡てを通じて一道の生氣を保たしめる非凡なる感受性と非凡なる歌才とを以てしてその或

（參考のため漢字書取の部分もあげておく）

（幽　寂）

（毫）（人爲彫琢）

（拘）（技巧）

（超　脱）

連用 通じ

未然 保た

は自然に對し或は人事に對してカントク（　）するところをさながらに歌つてゐる彼の歌が眞情リウロ（　）して人の胸にしみとほるものあるはこの故である從つてまた彼の歌には往々辭句の正確を缺きコウサウ（　）の不用意に過ぐるものが無いではない是等の點に於て彼は桐火桶を撫でゝスキカウ（　）苦吟しテンガ（　）の作を得て已むところの俊成の作及び俊成の子にしてカウチ（　）を極めギカウ（　）の限を盡した定家の歌風とゼツカウ（　）のタイセウ（　）をなしてゐる

（感　得）

（流　露）

（構　想）

過ぐる 連體

（推　敲）（典雅）

已む 連體

（巧緻）（技巧）

盡し 連用

（絶　好）（對照）

【講　評】

文法については好成績で言ふべき點が少いが、「已む」といふ語の活用形については「終止形」とする者が多かつた。これは文意を考へぬために「連體形」であることに氣附かぬ誤である。

傍線ヲ施シタル部分ニ就キ文法上知レル限リ說明セヨ。

（六高）

一、あしき事をなせそ

二、北へ向つてぞ歩ませける

三、俯仰天地に愧ぢず

傍線ヲ施シタル部分ニ就キ文法上知レル限リ説明セヨ。

（一）かなたよりくる人あり

（二）君の馬前にてわれ死なむ

一、「な……活用語連用形……そ」といふやうに、なぞが連用形をはさんで禁止の意を表す用法であるがカ變とサ變とには未然形をはさむ。せはサ變の未然形である。

二　向ひてのひが音便でつになつたものである。促音便の例。

三　愧ぢはダ行上二段活用動詞の未然形、それに打消の助動詞「ず」が附いたのである。

（一）くるはカ行變格動詞連體形

（二）死なむは

動（ナ變）未然形　助動（未來）

「死な　む」

である。

（三）早く起くる人

（六高）

（三）起くるはカ行上二段動詞の連體形、

（以上いづれも活用表を略す。答案にはつけた方がよいことは、講評中にも言はれてゐる

【講評】

昨年度と同じく三問題提出したが、成績は比較的良好であつた。

併し同じく正解のものに對しても「文法上知れる限り説明せよ」との注文があるので、そこに成績上若干の等差を附することが出來た。

「くる」がカ行變格活用の動詞、連體形なることを知らない者は殆んど皆無であつたが、正しき活用法を表に依つて示し得たものは比較的少く、又、表に依つて示したる場合にも誤謬をなすもの多少あつた。文語、口語の兩活用を示した者に至つては極めて稀であつた。

「君の馬前にてわれ死なむ」

これもナ行變格活用の動詞、未然形に、助動詞「む」を添へたものであることは理解してゐても、正しい活用を明示したものは比較的少かつた。中には

名　助動

死　なむ

と解釋せる者もあつた。

「早く起くる人」

これもカ行上二段活用なることを說明し得たものは少くなかつたが、活用を表示したものは約半數にて、中には文語の活用を全く知らず「これは起きるの誤なり」など記せる者もあつた。

要するに、中學校の文法教科書を十分に理解し居らざるもの比較的多く、右の如く平易なる問題に對してすら完全なる解答を與ふる者少きは慨歎すべき現象である。

成績は滿點より零迄あり、しかも零を附したるものは、必ずしも白紙のみに限らず、全く見當外れの解答も多少あつたのである。

中學校の文法教科書には必ず明示されて居る動詞の活用、或は次に示す如き中學四年程度の古文（增鏡の一部）に對してすら、かくの如き結果を示すは（受驗者一〇七五人中で、十點滿點に對して四點以上の者が僅かに二百數十人であつた。そして「はるゝ〳〵と見やらるる海の眺望」の「るる」といふ助動詞を巧みに譯した者が少かつたといふことは）、英語、數學を重要視し、國語を輕視する惡傾向の今もなほ存することを物語るものではあるまいか。

一、左ノ文ヲ通讀シ別ニ書キ拔キタル部分ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ。

このおはします處は人ばなれ里遠き島の中なり海づらよりは少しひき入りて山陰にかたそへて大きやかなる巖のそばだてるを便りにて松の柱に葦葺ける廊などけしきばかりことそぎたり誠に柴の庵のたゝしばしとかりそめに見えたる御宿りなれどさるかたになまめかしく故づきてしなさせ給へり水無瀨殿おぼし出づるも夢のやうになむはるばると見やらるゝ海の眺望二千里の外ものこりなき心地する今更めきたり

けしきばかりことそぎたり

柴の庵のたゝしばしとかりそめに見えたる御宿りなれど、

さるかたになまめかしく故づきてしなさせ給へり、

水無瀨殿おぼし出づるも夢のやうになむ、

はるばると見やらるゝ海の眺望、

一、左ノ例ニナラヒテ、次ノ歌ノ活用スル語ヲ排列書キニシ、ソノ接續ヲ明ヲカニセヨ

例　花散りたる後梢さびし

花散―
- る―
  - り―
    - ら
    - たり
  - たり
- たる―後梢さび―
  - し
    - しく
    - しく
    - し
  - しき
  - しけれ
- れ
  - れ
  - たれ

注意　排列の順序は。將然、連用、終止、連

參考

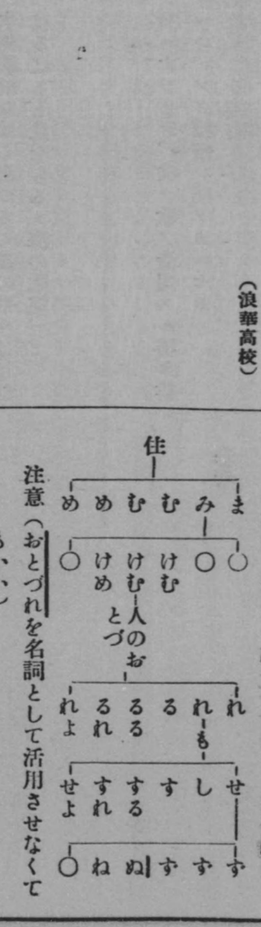
この問題は、「次の歌から活用する語を摘出して、その活用形を示せ」といふと同じであつて、單語に對する正確な智識をためさうとするものである。

體、已然、命令とす

荒れにけりあはれいく世の宿なれや
住みけむ人のおとづれもせぬ

（浪華高校）

左ノ文ノ各語ニ傍線ヲ施シテ其ノ品詞名ヲ記セ

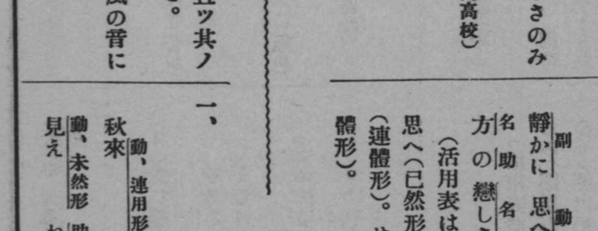


注意（おとづれを名詞として活用させなくてもいい）

又活用語ニ就キテハ本文中ニ於ケル語形ノ名稱並ビニ活用ヲ左表ニ記入セヨ。

靜かに思へばよろづに過ぎにし方の戀しさのみぞせむ方なき

（富山高校）



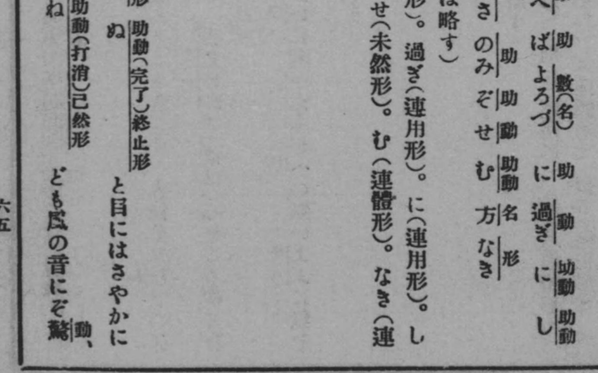
（活用表は略す）

思へ（已然形）。過ぎ（連用形）。に（連用形）。し（連體形）。せ（未然形）。む（連體形）。なき（連體形）。

（一）左ノ歌ノ動詞及ビ助動詞ヲ指摘シ、且ツ其ノ何形（未然形、連用形等）ナルカヲ記セ。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

一、



(二)左ノ文ノ誤謬ヲ正セ。

イ、世に榮ふるとも奢らず、人倫をふむで心をゆるめまじけれ

ロ、おたがいに考がえちがへの無いよふに氣をつけやう

(富山高校)

一、左ノ文中ニ活用語アラバ摘出シテ、本文中ニ於ケル語形ノ名稱及ビ活用ヲ左表ニ記セ。

主人の情心にしみ、別れがたき思ありしが、何時まで留るべき身にもあらねば、旅僧は心强くも立去りけり。

(富山高校)

未然形　助動(自然可能)連用形　助動(完了)連體形

かれ　ぬる

二、

(イ)世に榮ふるとも奢らず、人倫をふむで心をゆるめまじけれ。(或は、心をこそゆるむまじけれ)

(ロ)おたがいに考がえちがへの無いよふに氣をつけやう

(活用表略す)

しみ(連用形)。別れ(連用形)。難き(連體形)。あり(連用形)。し(連體形)。留る(終止形)。べき(連體形)。あら(未然形)。ね(已然形)。强く(連用形)。立ち(連用形)。去り(連用形)。けり(終止形)。

一、

(一)左の文語動詞の活用語尾の中未然形と已然形とを正しき假名にて書け

語幹＼語尾	未然形	已然形
强(し)		
閉(と)		
据(す)		
命(めい)		
願(かへり)		

(二)次の連語に誤あらばその誤れる部分を消して右側に正しき形を書け。但し文法上許容事項を

	未然形	已然形
强	ひ	ふれ
閉	ぢ	づれ
据	ゑ	うれ
命	ぜ	すれ
願	み	みれ

二、

死にたり(ぬは、ナ變動詞には附かぬ助動詞で

適用すべからず。

死にぬ	得せしむ
受けり	申せし事
耕作さす	

（一高）

（一）次ノ文中ヨリ活用スル語ヲ拔出シ其ノ活用ヲ左ノ表中ニ記入セヨ。（總點三十）

（イ）波靜まりて海上穩かなり

（ロ）悔いてもかひの無い事でした。

一、

（イ）靜まり（ラ、リ、ル、ル、レ、レ）ラ行四段動詞

穩かなり（ナラ、ナリ、ナリ、ナル、ナレ、ナレ）形容動詞

（ロ）悔い（イ、イ、イル、イル、イレ、イヨ）ヤ行上一口語動詞

無い（〇、ク、イ、イ、ケレ、〇）口語ク活形容詞

で し（デセ、デシ、デス、〇、〇、〇）口語指定助動詞

ある。「死ぬ」を四段活とみるは許容事項にあたる。

得しむ。

受けたり（りは四段、サ變にのみ接續する）。

申しし事。

耕作せさす。

（二）文語動詞ノ「明かす」「　」ノ下ニソレゾレ助詞ノ「り」「けり」「しむ」「べし」「なり」ヲ附ケタル連語ヲ列記セヨ。

但シ「來」ノ字ニハ必ズ振假名ヲ施スベシ。（一高）

一、

た（タラ、〇、タ、タ、タラ、〇）口語過去助動詞

二、

明かせり。明かしけり。明かさしむ。明かすべし。明かすなり。

來けり。來しむ。來べし。來なり。來るなり。

一、次ノ文中ノ傍線ヲ施シタル語ノ品詞ト文法上ノ意義トヲ左ノ例ニ倣ヒテ答ヘヨ。（例略ス）

この書物は一度讀んだ事があるやうだが、さうでないかも知れない。

だ	助動詞	過去の意を表す
が	助詞	接續の意を表す
ない	形容詞	打消の意をあらはす補助的用法
知れ	動詞	未然形。こゝは否定をあらはすないに接續する形
ない	助動詞	否定を表す

二、次ノ文ノ傍線ヲ施シタル部分ノ構成ヲ左ノ例ニ倣ヒテ説明セヨ。

（イ）月夜にそぞろあるきす

（ロ）歌よめと仰せらる

（ハ）敵攻め來りなば撃滅せん

〔例〕「偲ばる」――動詞「偲ぶ」の未然形に自發の助動詞「る」が附いたもの（一高）

二、

（イ）「そぞろあるき」――副詞「そぞろ」に動詞「あるく」の連用形「あるき」が附いて名詞となり下のサ變「す」に續いてゐる。

（ロ）「仰せらる」――動詞「仰す」の未然形「仰せ」に尊敬の助動詞「らる」が附いたもの。

（ハ）「來りなば」――動詞「來る」の連用形「來り」に、完了助動詞「ぬ」の未然形「な」が附き、助詞「ば」が添うて假定の意を表してゐる。

一、次の歌の中の助動詞ヲ傍ニ傍線ヲ附シテ示セ。又その中の動詞二ツヲ選ビ、ソレガ如何ナル活用形ノ動詞ナルカヲ示シ、且ツソレト判定スベキ理由アレバ簡單ニ記セ。

「秋の菊匂ふ限はかざしてむ花より先と知らぬ我身を」（浦和高校）

一、

秋の菊匂ふ限はかざしてむ
花より先と知らぬ我身を

匂ふ（ハ行四段）（ズがア列音のはに附くから四段活と推定する）

かざす（サ行四段）（ズがア列音のさに附くから四段活と判定する）

（一）左ノ各項ノ下ニソレゾレヲ含ム短文ヲ一ツヅツ記入セヨ。

（イ）完了ノ助動詞「つ」ノ連體形

（ロ）形容詞「貧し」ノ已然形

（ハ）口語動詞「枯れる」ノ連體形

（ニ）口語使役ノ助動詞「せる」ノ連用形

（二）左ノ文中ノ傍線ヲ附シタル部分ヲ單語ニ分チ

一、

（イ）あはれいみじくもいひつるものかな

（ロ）家貧しけれど志高し

（ハ）草の枯れる秋が來た

（ニ）十分に餌を食はせた

二、

各單語ノ所屬品詞ヲ示シ、且活用スル語ナラバ何形ナルカヲ言ヘ。

（1）後小路宮のおはします小坂どのの棟にいつぞや縄をひかれたりしかばかのためし思ひ出でられ侍りしにまことや烏のむれゐて池のかへるをとりければ御覽じかなしませ給ひてなんと人の語りしこそさてはいみじくこそと覺えしか。

（2）良からうとは思はなかつたのです。（廣島高師）

（1）

（イ）

ひか	動、未然形
れ	助動（受身）連用形
たり	助動（時の完了）連用形
しか	助動（過去）已然形
ば	助

（ロ）

御覽じ	動、連用形
悲しませ	動、未然形
給	助動（尊敬）連用形
ひて	助動（敬語）連用形
なん	助
と	助

（2）

良から	形容動詞。未然形
う	助動（未來）終止形
と	助
は	助
思は	動、未然形
なかつ	助動（打消）連用
た	助動（完了）連體形
の	助
です	助動（指定）終止形

【講評】

一、一番も二番も文語と口語とを含むが、文語の成績は口語に比べて稍優良である。

一、優秀答案と劣等答案との差が大きい。中には文法の教授を受けたか否かを疑はしめる樣なまづいのもあつた。

一、一番においては、活用形は記憶してゐるが、其の機能を知らないため正しき例文を擧げることの出來なかつたものが多い。又、

「捨つる」「落つる」「果つる」

等の「つる」を「つ」の連體形と誤つたものも相當多い。

一番の（ハ）は正しき答案が甚だ少い。（ニ）は使役の助動詞「せる」の連用形と誤認せるものに左の如きものがある。

仕事をさせる。狙撃せられる。打たせよ。捨てさせた。見せて。行かした。

一、二番においては、助詞と接續詞との區別の不明なものが多い。單語と接頭語接尾語との關係も明かでないものが多い。

單語分解において多く誤れるは

○ひかれを一語とせるもの

○しかばを「し　かば」と分けたもの

○御覽じを二語とせるもの

○悲しませを「悲し　ませ」と分けたもの

○なんを、「行きなん」等の「なん」（助動詞）と誤認せるもの

○良からうを「良か　らう」と分けたもの

○とはを一語とせるもの等。

一、左ノ文中ニ句(節)ヲ含ムモノアラバソノ句ニ傍線ヲ施セ

(イ) 家居のつきづきしきこそ興あるものなれ。

(ロ) 私たちはそこで夜が明けるのを待ちました

二、左ノ文中ノ活用スル單語ニ傍線ヲ施シ且何形ナルカヲ示セ。

例　花は咲かず

1　將然形

(イ) 主語部　主節　述部　連體修飾節　主　述

家居の　つきづきしきこそ　興ある　もの　なれ

(ロ) 連體修飾節　主　述

私たちはそこで夜が明けるのを待ちました。

(問題は傍線を要求してゐるだけであるから、答案には、

家居のつきづきしきこそ　興ある

夜が明ける

とさへすればいいのである)

2　終止形

(イ) 一木一草に至るまで歴史あらぬはなく、人をして低回去るを得ざらしむ。

(ロ) 遠い山々へはまだ雹の來ることがあつて雨でも降れば袷では寒いこともある。

(廣島高師)

(イ) 一木一草に至るまで歴史あらぬはなく人をして低回去るを得ざらしむ

(1)連體形　(2)未然形　(3)連體形
(4)連用形　(5)連體形　(6)未然形
(7)未然形　(8)終止形

(ロ) 遠い山々へはまだ雹の來ることがあつて雨でも降れば袷では寒いこともある

(1)連體形　(2)連體形　(3)連用形
(4)假定形　(5)連體形　(6)終止形

【講評】

一、答案の認め方が不注意、不眞面目である。たとへば記載形式を誤つてゐること。番號を見違へてゐること。脱字の多いこと。文字の書き方の粗雜なこと等。

二、連體句を以つてそれに下接する體言をも含むものと考へてゐる者が相當に多い。

三、「至るまで」「あらぬは」「去るを」の「至る」「ぬ」「去る」を終止形と考へた者も少くない。

一、左ノ文中ニ誤アラバコレヲ正シ、尙ソノ理由ヲ說明セヨ。

（イ）教育者たらんとするものは、常に順良・信愛・威重の諸德を修むるやう心掛くるべし。

（ロ）藝術家の中には、科學を理解し愛好する人も隨分あるであろうが、又これに對して一種の反感を抱いてゐるものもあるやうに見える。

二、左ノ語ノ連用形と已然形とを平假名ニテ書ケ

過ぐ（文語動詞）　見る（文語動詞）　經（文語動詞）　す（文語助動詞）　ぬ（文語助動詞）

（廣島高師）

一、

（イ）心掛くるべし。（べしは、終止形に附く助動詞。「心掛くる」は連體形。）

（ロ）あろうが。（「ある」の未然形「あら」に未來の助動詞「う」を附ける）

二、

連用形	已然形
過ぐ	ぎ　ぐれ
經	へ　ふれ
ぬ	に　ぬれ
見る	み　みれ
す	す　ねれ

（參考）

連用形は「タリ」の附く形

已然形は「ドモ」の附く形

左の文に就いてその次にある問に答へよ。

瀨戸內海には、大小無數の島々各所に散在す。船の其の間を行く時、到る處に岬あり、灣あり島かと見れば岬なり、岬かと見れば島なり。一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

（一）右の文中より活用の種類を異にする動詞を一語づつぬき出せ。

（二）右の文中より助動詞を全部ぬき出せ。

（三）右の文中より副詞を三語ぬき出し、その修飾する語をも示せ。

一、動詞

散在す（サ變）

行く（四段）

あり（ラ變）

見れ（上一段）

あらはれ（下二段）

盡くる（上二段）

二、助動詞

なり

ざる

如く

す

三、

副 未だ　去らざるに

（四）左の文章を文の成分に解剖せよ。（傍線を施してその成分の名を記せ。）

瀬戸内海には、大小無數の島々各所に散在す。

（奈良女高師）

四、

更に	副
あらはれ	
忽ち	副
開く	
瀬戸内海には	補語
大小無數の	修飾語
島々	主語
各所に	補語
散在す	述語

主部

左ノ文ニツキテ其ノ次ニアル問ニ答ヘヨ。

學の道にこゝろざす人は、古より今に變り來し有樣をよく知りえむと心がくべし。古の事今より見ては、いと思の外に異なるものにて、事によりては、その移り來し理わかぬもあり。さるをたゞひたぶるに、文のうはべゝ今の世のさまとを思ひあはせて、大方にのみ心得ゐては、かすめる夜半の月を見るやうにて、いとおぼ〳〵しきものなり。

（一）活用ノ種類ヲ異ニスル動詞ヲ五ツヌキ出シ、ソノ種類ト活用形トヲ記セ。

動詞	活用の種類	活用形

（二）種類ヲ異ニスル助動詞ヲ五ツヌキ出シ、ソノ種類ヲイヘ。

助動詞	種類

一、

こゝろざす	サ行四段	連體形
來	カ行變格	未然形
え	ア行下二段	未然形
あ	ラ行格變	終止形
り	マ行上一段	連用形
見		

二、

し	過去	（變り來し有樣）。
む	未來	（知りえむと）
べし	命令	
ぬ	打消	（理わかぬも）
なり	指定	（ものなり）

(三)副詞ヲ三ツヌキ出シ、ソノ修飾スル語ヲ示セ

副詞	修飾スル語

(四)傍線ヲ施シタル文ノ主語ト述語ヲイヘ。

（奈良女高師）

一、次ノ文ノ誤ヲ正シソノ理由ヲ記セ。

(一) 負ふた子に教えられて淺瀬を渡る。

(二) 裁判の目的は人を爭はさせ、又は人を罰すことにあらず。

(三) あなには今日ははよふ歸つてゐらつしやいましたね。

(四) 用なき者はみだりに出入するべからず

二、次ノ文中ニ於ケル主語ト述語トヲヌキ出セ。

歴史は長し七百年。興亡すべて夢に似て、英雄墓は苔むしぬ。

（奈良女高師）

(一)次の文に於て、――をつけたる成分は、文章法より見て、如何なる役目をなすか。

（總點五十）

三、

よく　知りえむ

いと　思ひの外に

ひたぶるに　思ひあはせ

四、

學の道にこころざす人は（主語）古より今に變り來し有樣をよく知りえむと心がくべし（述語）

一、負ふた（負ひたる子のひのう音便）

教えられて（教ふはハ行下二段動詞）

二、爭はさせ（使役助動詞サセは四段活に附かず）

罰すことに（罰すの連體形は罰する）

三、よふ（よくのう音便）

ゐらつしやいました（敬語いらせらるの意である。「居る」の意でない）

四、出入するべからず（べしは終止形に附く。出入する（サ變）は連體形）

二、歴史は（主）長し（述）七百年。興亡（主）すべて夢に似て（述）英雄墓は（主）苔（主）むしぬ（述）。

一、

例　副修　形修　主語　述語
その後世しづまりて文治の頃敕撰あり
（副修は副詞的修飾語の略）
（形修は形容詞的修飾語の略）

（ア）月日の過ぎ行くこと梭の飛ぶよりも速し

（イ）お嬢様　さあ　早く　おやすみ　遊ばせ

（二）次の文より動詞・形容詞・助動詞をぬき出し、其の活用形を表に記入せよ。

（ウ）君の行く　べき山川は
落つる涙に見えわかず
袖のしぐれの冬の日に
君に贈らむ花もがな

（エ）皆さんはあの涙ぐましい阿佛尼を御存じでせう。
（東京女高師）

（ア）月日の過ぎ行くこと梭の飛ぶよりも速し
述語　主語　述語

（參考）

主部	述部
月日の過ぎ行くこと	梭の飛ぶよりも速し
主	主
述	述

（イ）

獨立（呼掛）		獨立	副修		述語
お嬢様	さあ	早く	おやすみ	遊ばせ	

二、

（ウ）

行く	（動）	か	き	く	く	け	け
べき	（助動）	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
落つる	（動）	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
見え	（動）	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
わか	（動）	か	き	く	く	け	け
す	（助動）	す	す	ぬ	ぬ	ね	○
贈ら	（動）	ら	り	る	る	れ	れ
む	（助動）	○	○	む	む	め	○
涙ぐましい	（形）	しく	しく	しい	しい	しけれ	○
でせ	（助動）	でせ	でし	です	○	○	○
う	（助動）	○	○	う	○	○	○

【解評】

（一）

間違のでたらめなものは姑く之を措き、幾分理由のあるものについて述べてみる。

過ぎ行く（述語）を「形容詞的修飾語」としたのは

主語　述語
月日の　過ぎ行くこと
形容詞的修飾語

といふ關係を考へなかつたのである。

「さあ」（獨立語）を感動詞又は副詞としたのは、文章法といふ立場を忘れたものである。

「早く」（副詞的修飾語。連用修飾語）を副詞、形容詞としたのも同樣の間違である。

（二）

文語よりも口語に間違が多かつた。その主なるものをあげると

○落つるを「落つ（動）る（助動）」とし、
○見え わか す を「見（動）え（動）わか（動）す（助動）」とし、「見え（動）わかす（助動）」とし、「見えわか（動）す（助動）」とし、
○贈らむ を「贈（動）らむ（助動）」とし
○涙ぐましいを「涙ぐま（動）しい（形）」とし
○でせう を「で（助動）せ（助動（或はサ變））う（助動）」とし「でせう（助動）」とするの類である。

今回の成績は
優　三五名。　良　二七九名。　可　一八五名。　劣　一五二名。
であつた。

（一）次の文の誤を正せ。

一、

例　任重ふ（う）して負擔に堪へ（へ）ざるが如けれ（如くなれ）ど決して然らず。

ア、現今世界の事情は日を逐ふて我が國民の責任を重からしむ苟も學生たるものは今後一段の精勵を加え一意學業の研鑽に努むと共に專心德性の修養に從い他日業を卒りて社會に出づれば能く邦家須要の器材として國運の發展に寄與し以て聖代の惠澤に報ふ所なかるべからず。

イ、何故のあはれな最後であろう武人が公卿化した爲である。若し平家一門という集合體に心があらば思うであろう「我は武人である武人たるものが何を苦しむで公卿の眞似をしたのであろう。滅びかけた前代の亡靈に乘りうつられたばつかりにあたら一門が、此の海底の藻屑とはなるのだ」と

（二）次の文の主語と述語とを指摘せよ。

例　我等は（主語）時の（主語）うつるを（述語）知らざりき（述語）

（ア）逐ふ（う）て。加え（へ）。努む（むる）と共に。從い（ひ）。卒り（へ）て。出づ（で）れば。報ふ（ゆる）所。

（イ）あろう（ら）。いう（ふ）。思う（ふ）であろう（ら）。苦しむ（ん）でしたのであろう（ら）。

參考
最後（一番しまひ。最終）
最期（死にぎは。臨終。末期（マツゴ））

二、

ウ、大廈高樓の櫛比せしあたり今はただ荒廢寂寞の巷たるのみ

エ、年のたつのは早いもので雪子ももう來春は學校を卒業することとなつた。

（東京女高師）

（ウ）大廈高樓の（主語）櫛比せし（述語）あたり今はただ荒廢寂寞の巷たるのみ（述）

（エ）年の（主語）たつのは（述語）早いもので雪子もも（主語）來春は學校を卒業することとなつた。（述語）

【講評】

入學志願者は六百一名であるが、その成績を優、良、可、不可に別けてみれば、

優	八六
良	二一四
可	一五七
不可	一二一

となる（缺席二十二名）。（中略）總じて品詞篇よりも文章篇の、文語よりも口語の知識が確實でないと言はれよう。

一、次ノ文中ヨリ活用スル語ヲ摘出シ其ノ活用形ヲ次ノ表ニ記入セヨ

眞夜中にふと目を覺すと靜寂のうちに鎖された天地の中に星屑の瞬く外はこの世に生動してゐるものの何一つあるとも覺えぬところにひゆらひゆらひゆらと細い悲しげな聲でかいつぶりの鳴く聲が水の上からつたはる。

一、

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
覺す	さ	し	す	す	せ	せ
鎖さ	さ	し	す	す	せ	せ
れ	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
た	たら	○	た	た	たら	○
瞬く	から	き	く	く	け	け
生動し	せ	し	する	する	すれ	せ
ゐる	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ	ら	り	る	る	れ	れ
覺え	え	え	える	える	えれ	えよ
る	ず	ぬ	ぬ	ぬ	ね	○
細い	く	い	い	い	けれ	○
悲しい	しく	しい	しい	しい	しけれ	○
な	だら	だ	な	なら	け	け
鳴く	か	き	く	く	け	け
つたはる	ら	り	る	る	れ	れ

二、左ノ文ニ誤アラバ之ヲ正シ本文ノ右傍ニ記入セヨ。

ある朝磯の方より蜻蛉なんどの如くに痩せ衰えたる者よろぼい出で來たりもとは法師にてありけると覺えて髪は空樣に生いあがり萬づの藻屑取りつけて荊を戴いたるが如し節あらはれて皮ゆたひ身に著たるものは絹布のわきも見へず片手には荒海布を持ち片手には魚をもろふて持ち歩むやうにはしけれどもはかも行かずよろよろとしてぞ出で來たり。

三、次ノ文ノ主語ト述語トヲ指摘セヨ。

國際政局は今や稀に見る難局に直面してゐるかくの如き危險な諸事件が相踵ぐ時局は曾て見ないところである。（東京女高師）

「な」は指定の助動詞「だ」の連體形。

二、
衰へたる。　よろぼひ。
ありけると。
生いあがり。
見へず。
もろふて。
としてぞ出で來たり。

三、
主語　述語
國際政局は今や稀に見る難局に直面してゐる。
主語　述語　主語
かくの如き危險な諸事件が相踵ぐ時局は曾て見ないところである。

（一）次ノ和歌ノ中ニアル動詞オヨビ助動詞ノ活用表ヲ作レ。

岡の邊に家居せしより梅の花をりてかざさぬ春なかりけり

（二）左ノ文ニ傍線ヲ附ケテ主語ト述語トノ成分ヲ説明セヨ。

智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕にこれまでに類のない珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。（東京高師）

一、

動詞	せ	セ、	シ、	ス、	スル、	スレ、	セ
動詞	をり	ラ、	リ、	ル、	ル、	レ、	レ
	かざさ	サ、	シ、	ス、	ス、	セ、	セ
助動詞	し			き、	し、	しか、	
	ぬ	ず	ず、	ず、	ぬ、	ね、	
	けり	けら、	○、	けり、	ける、	けれ、	○

「無かり」は無く（形動）あり　のつづまつた形容動詞で、活用はラ變に準ずる。

二、
主　述
智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕にこれまでに類のない珍しい罪人が高瀬舟に載せられた
主　述　主　述

左ノ文章ニツキテ文ノ成分ヲ說明シ次ニ文中ノ形容詞ト動詞ト助動詞トノ活用表ヲ作レ。

堅き氷も霜を履むより至るならひなれば亂臣賊子といふ者はそのはじめ心言葉を愼まざるより出で來るなり

形修	主	補	述	主	述	補	副修
堅き	氷も	霜を履むより	至るならひなれば	亂臣賊子と	いふ者は	心言葉を愼まざるより	そのはじめ

堅き	履む	至る	いふ	愼ま	出で	來る	出で來るなり	堅き	履む	至る	いふ	愼ま	出で	來る	出で來るなり	なれ	ざる	なり	なれ	ざる	なり	なれ	ざる
(形)				(動)				(助動)															
ク、	マ、	ラ、	ハ、	マ、	デ、	コ、	ラ、	ナラ、	ザラ、	ナラ、	ク、	ミ、	リ、	ヒ、	ミ、	デ、	キ、	ク、	ナリ、	ザリ、	ナリ、	シ、	ケレ、
ク、	ミ、	リ、	ヒ、	ミ、	デ、	キ、	ク、	ナリ、	ザリ、	ナリ、	ク、	ミ、	ル、	フ、	ム、	ヅ、	ク、	クル、	ナル、	ザル、	ナル、	キ、	ケレ、
シ、	ム、	ル、	フ、	ム、	ヅ、	クル、	クレ、	ナル、	ザル、	ナル、	ク、	ム、	ル、	フ、	ム、	ヅル、	クル、	クレ、	ナレ、	ザレ、	ナレ、	ケ、	○、
キ、	メ、	レ、	ヘ、	メ、	ヅレ、	コヨ、	ナレ、	ザレ、	ナレ、	ナレ、	ケ、	メ、	レ、	ヘ、	メ、	デヨ、	コヨ、	コ、	ナレ、	ザレ、	ナレ、	テ、	テ、

一、左ノ和歌ノ中ノ動詞ト助動詞トノ活用表ヲ作リ、且其ノ助動詞ノ連續ヲ說明セヨ。

降る雪は年の關ともなりななむひまゆく駒の立ちとまるべく

若水をくむ車井のおとすなり今こそ春もめぐりきぬらし

降る	なり	ゆく	立ち	とまる	くむ	す	めぐり	き	な	べく	なり	ぬ	らし	ラ、	ラ、	カ、	タ、	ラ、	マ、	セ、	ラ、	コ、	ナ、
リ、	リ、	キ、	チ、	リ、	ミ、	シ、	リ、	キ、	ニ、	ベク、	ナラ、	ナ、	ラシ、	ル、	ル、	ク、	ツ、	ル、	ム、	ス、	ル、	ク、	ニ、
ル、	ル、	ク、	テ、	ル、	ム、	スル、	ル、	クル、	ヌ、	ベク、	ナリ、	ニ、	ラシ、	ル、	ル、	ケ、	テ、	レ、	メ、	スレ、	レ、	クレ、	ヌル、
レ、	レ、	レ、	ケ、	テ、	レ、	セヨ、	メ、	レ、	ヌレ、	ベシ、	ナリ、	ヌ、	ラシ、	レ、	レ、	レ、	テ、	レ、	メ、	セヨ、	レ、	コ、	ネ、
レ、	レ、	レ、	ケ、	テ、	レ、	セヨ、	メ、	レ、	ネ、	ベキ、	ナル、	ヌル、	ラシ、	レ、	レ、	レ、	テ、	レ、	メ、	セヨ、	レ、	コ、	ネ、
										ベケレ、	ナレ、	ネ、	ラシ、										

連續の說明

「な」　時の完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」は、動詞「なり」の連用形に連續してゐる。（ラ變には連體形に）

「べく」　動詞「とまる」の終止形に連續してゐる。

「なり」　動詞「す」の終止形に連續してゐる。この場合は詠歎の意を示す。指定には連體形に接續して「するなり」といふ。

「ぬ」　「なりななむ」の「な」の場合と同じである。

「らし」　助動詞「ぬ」の終止形について推量の意を示してゐる。（ラ變には連體形に）

二、

對立節
主語　春が……
述語　來るので……

對立節
主語　櫻の花が
述語　咲く　（重文）

二、左ノ文ノ主語ト述語トヲ指摘シ且文ノ構成ノ種類ヲ說明セヨ。

札幌あたりでは春が遲く來るので五月の中頃にやうやう櫻の花が咲く

（東京高師）

左ノ文章中ノ文法上の誤謬ヲソノ右傍ニ訂正シ左傍ニソノ理由ヲ記セ。

（イ）道を求むにせちなる志は例ひば飢へて食を求め渴きて湯水を求めるが如くなるべし。

（ロ）瀨戸の先陣をしやうと或る漁夫に尋ねて淺い所を敎えてもらいその漁夫がこれを他人に漏らそうかと危んで殺してしまつた。　（北海帝大）

（イ）求むるに。例へば。飢ゑて。求むるが。

（ロ）しよう。敎へて。もらひ。さうか。

（理由略す）

【講評】

本校において、近來絕えてなかつた文法を今年は新しく試みる事となつた。これはとかく閑却視されがちな國文法敎授の方にもよい影響がある事と信ずる。母國語の文法の基礎的な知識の必要はいふまでもない事であるが、今回の答案は、受驗生の此方面の常識の混雜を物語つてあまりあるものがあつた。

（次の文中から使役及び受身の助動詞一つづつをとり出し、何形に用ひられて居るかを記せといふ問題である。長文であるから、必要な部分だけを示しておく）

此の度敎賀へ向うて候ふ者共が不覺にてこそ里討たせまゐらせて（せ。使役。連用形）

見殿を討たせまゐらせて候へ……(中略)……百千の甥子共が討たれ候ともなげくべきにては候はず。

(北海帝大)

(同じく農學部實科並に附屬土木專門部の問題は、文中の助動詞摘出である。而してその種類と接續の說明とを求めてゐる。

……(前略)……枝も葉も雫だちたるに夕日こぼるる風情こそ色ことにうるはしけれ遙かに遠山をのぞめば耳にかよはぬ鹿の聲さへ心にうごきて其の里人の目をさましけん夜々の……(後略)

(三)左ノ文ヲヨミテ、後ノ問ニ答ヘヨ。

契りおきつる人こそ無けれ、唯にてはえあるまじう思ひなさるる月のけしきに催されて、あたり近き山寺にと思ひ立つ。げに浮世の塵かき拂

討たれ候とも(れ。受身。連用形)

雫だちたるに(完了助動詞。「立つ」の連用形「だち」に接續してゐる)

かよはぬ(打消。「通ふ」の未然形「かよは」に接續)

さましけん(過去推量。「さます」の連用形「さまし」に接續してゐる)

(1) 受身の助動詞。終止形「る」

(2) あたり近き山寺をさす。

ひてこのすまひこそ美しけれとうちずせらるるに、いささかかれにたれど、岩間に湧き出づる瀧落しの水の、やがて影とともに山の井に落つめるが、いと清う薄ききぬに白玉包みたるさまして、飽かずいとあはれなり。

(1) 「れ」ノ終止形ヲ示シ且ツ文法上ノ意義ヲノベヨ。

(2) 「このすまひ」トハ何ヲサスカ。

(3) 「らるる」ノ文法上ノ意義トコノ語ニアタル口語トヲ問フ。

(4) 「いささかかれにたれど」ヲ品詞ニ分チ、且ツ活用スル語ニアリテハ、コヽニ用ヒラレタル形ガ何形ナルカヲ述ベヨ。

(5) 「影」ハ何ノカゲカ。

(京都醫大)

例

契り	おき	る	人	こそ	無
動詞(連用形)	助動詞(連體形)		名詞	助詞	形容詞(已然形)

け	れ			

(3) 自然さうなるといふ可能の助動詞。終止形は「らる」。口語は「られる」。「自然に」「思はずも」等の意。

(4)

いささか	かれ	に	たれ	ど		
副詞	動詞(連用形)	助動(完了)(連用形)	助動(完了)(已然形)	助詞		

(5) 月の影

五、左ノ文ニ句讀點（、。）引用符（「　」）ヲ施シ且ツ後ノ問ニ答ヘヨ。

高名の木のぼりといひし男人をおきてて高き木にのぼせて梢をきらせしにいと危く見えしほどはいふこともなくておるる時に軒たけばかりになりてあやまちすな心しておりよと言葉をかけ侍りしをかばかりになりてはとびおるともおりなむいかにかくいふぞと申し侍りしかばその事に候ふ目くるめき枝危きほどはおのれがおそれ侍れば申さずあやまちはやすき所になりて必ず仕ることに候ふといふあやしき下萬なれども聖人のいましめにかなへり。

（1）「梢をきらせしに」ヲ品詞ニ分チ、且ツ活用スル語ニアリテハ、ソノ終止形ヲ示セ。

例　聖人の（名詞）（助詞）　いましめに（名詞）（助詞）　かなへ（動詞（かなふ））

……男、……おきてて、……

のぼせて、……きらせしに、……

……なくて、……時に、……

……なりて、「あやまち……おりよ」と……

……侍りしを、「かばかりに……

……なむ。……いふぞ」と…かば、「その……

……に候ふ。……ほどは、……

……申さず。……

仕ることに候ふ」といふ。…なれども、……

（1）梢（名）を（助）切ら（動）せ（助）し（動）に（助）（切る）（す）（き）

（2）「言葉をかけ侍りしを」トアルハ誰ガ誰ニ言葉ヲカケタカ。

（3）「申し侍りしかば」トアルハ、誰ガ誰ニ申シタカ。

（4）「おのれ」トイフ語ノ意味

（5）「あやしき下萬」トイフハ、誰ノコトカ。

（京都醫大）

（2）高名の木のぼりが、木にのぼつた男に。

（3）誰かが高名の木のぼりに。

（4）自身、自分。

（5）高名の木のぼりのこと。

左ノ文中傍線ノ部分ニツキテ下ニ問フトコロニ答ヘヨ。

行く川の流は絶えずしてしかももとの水にあらず淀みにうかぶうたかたは且つ消え且つ結びて久しくとどまることなし世の中にある人とすみかとまたかくの如したましきの都のうちに棟をならべ甍を爭へるたかき賤しき人のすまひは―（中略）―

（1）消えは連用形

（2）爭へ（動）る（助動）

終止形	連體形
爭ふ	爭ふ
り	る

あしたに死し夕に生るるならひただ水の泡にぞ(3)似たりける—(中略)—かりのやどり誰が爲にか心を(4)なやまし何によりてか目をよろこばしむる(5)そのあるじとすみかと無常を爭ふさまいはゞあさがほの露にことならず—(後略)—

(1) 未然形ヵ連用形ヵ。

(2) コノ中ノ活用スル語ヲトリ出シテソノ終止形ト連體形トヲ示セ。

(3) 「ぞ」ヲ「こそ」ト改ムル時下ニ及ボス影響如何。

(4) (5) コノ中ノ活用スル語ヲトリ出シテソノ未然形ト連用形トヲ示セ。

(6) 「その」ノカカルトコロ如何 (京都醫大)

一、左ノ文中スベテノ活用スル語ニ傍線ヲ施シテソノ右ニ品詞ト活用形トヲ記セ。

品かたちこそ生れつきたらめ心はなどか賢きにも遷さば移らざらん。

二、左ノ文中誤アラバ之ヲ正シ右側ニ記セ。

辛ふじて峠を越へたところが前方は一面に霧が蔽ふてゐ一寸村落があるようには見へなかつた。 (京城帝大豫科)

(3) 水の泡にこそ似たりけれ(已然形で結ぶ)

(4) (5)

なやまし	未然形 なやまさ	連用形 なやまし
よろこば	よろこば	よろこび
しむる	しめ	しめ

(6) 「その」は「さま」にかゝる。「あるじとすみかと無常を爭ふそのさま」

一、品かたちこそ生れつきたらめ心はなどか賢きにも遷さば移らざらん。

動(連用形) 動(連用形) 助動(完了)(未然形) 助動(未來)(已然形) 形(連用形) 動(未然形) 動(未然形) 助動(打消)(未然形) 助動(未來)(終止形)

二、辛ふじて峠を越へたところが前方は一面に霧が蔽ふてゐ一寸村落があるようには見へなかつた。

一、左ノ文中動詞・助動詞ノ右側ニ傍線ヲ施シテソノ活用形ノ名ヲ記セ。

昨夜はおそく寢ねたれど今朝は早くも起き出でつ。

二、左ノ文中誤アラバ之ヲ正シ右側ニ記セ

一、昨夜はおそく寢ね 動(連用形) 助動(完了)(已然形) たれど 今朝は早くも起き 動(連用形) 出で 動(連用形) 助動(完了)(終止形) つ

二、あそこの花はまだ散つてしもう ようなこと

あそこの花はまだ散つてしもうようなことはなかろふと思う。

（京城帝大豫科）

はなかろふと思う。

一、左ノ和歌中ヨリ動詞ヲ抽出シ、次ノ餘白ニソノ活用表ヲ作レ。

うめが枝に來ゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ

二、左ノ文章中ノ助動詞ノ右側ニ傍線ヲ施シ、ソノ種類ト活用形ノ名トヲ記セ。

折しも乃木大將は二挺の鎌もて寮側の草を刈り居られければいかがすべきとしばし心にたゆたひしがただに

來ゐる	降り	鳴かけり
未然形	こ	ら
連用形	き	り
終止形	く	る
連體形	くる	るる
已然形	くれ	るれ
命令形	こよ	るよ

（參考）「つつ」は助詞である。

居られければ　れ（敬語、連用形）　けれ（過去、已然形）

すべきと　べき（推量。適當。連體形）

たゆたひしが　し（過去。連體形）

過ぎんもさすがにて近づき會釋しつゝ御手傳をといひしに一挺の鎌を貸されたり。

（京城帝大豫科）

過ぎんも　ん（未來。連體形）

いひしに　し（過去。連體形）

貸され　れ（敬語。連用形）

たり　たり（完了。終止形）

左ノ和歌中ノ用言（活用語）ヲ抽出シソノ活用表ヲ作ルベシ。

降りつみし高嶺のみ雪解けにけり清瀧がはの水のしらなみ

（旅順工大豫科）

注意　用言は動詞と形容詞であるが、こゝは活用する語の意味で出題されてゐる。

降り	つみ	し	解け	に	けり
ら	ま		け	な	けら
り	み		け	に	
る	む	き	く	ぬ	けり
る	む	し	くる	ぬる	ける
れ	め	しか	くれ	ぬれ	けれ
れ	め		けよ	ね	
ラ行四段動詞	ラ行四段動詞	カ行下二段動詞	助動詞去過	完了動詞	助過去動詞

左ノ和歌及文章ノ「なむ」ノ異同ヲ說明スベシ

燒かすとも草はもえなむ(イ)春日野をただ春の日に任せたらなむ(ロ)。

いざ櫻われも散りなむ(ハ)一盛ありなば人に憂目見えなむ(ニ)

月夜よし思はむ友と對ひ居たらむなむ(ホ)うれしかるべき。

イ、左の文中の助動詞を指摘し、且つ其の種類を示せ。

玉は砂礫に交りて玉人を待てり、世に尊び重んぜらるる人はたかくの如きか。

ロ、左の文中の動詞、形容詞、助動詞、助詞を品詞別に分類せよ。

雪と匂ひしあたりは何處ぞ、雪と亂れしあたりは何處ぞ、薄く濃き別こそあれ、ただ一色の綠もて包まれたる遠近の森よ、木立よ。

（臺北帝大農林專門部）

（イ）完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、未來の助動詞「む」の終止形「む」がつき、動詞「もゆ」の連用形についてゐる。「だらう」の意を表す。

（ロ）完了の助動詞「たり」の未然形に附いた助詞の「なむ」で、「任せておいて貰ひたい」といふ願望を表す。

（ハ）（ニ）この「なむ」は共に（イ）の場合と同じ。

（ホ）係詞の詞で、「べき」といふ連體形の結語に對してゐる。

（イ）待てり（時の完了の助動詞）

重んぜらるる人（受身）

かくの如きか（比況）

（ロ）動詞。匂ひ。亂れ。あれ。包ま。

形容詞。薄く。濃き。

助動詞。し。し。れ。たる。

助詞。と。は。ぞ。と。は。ぞ。こそ。の。の。よ。よ。

綠もてはもち　てのつづまつた形である

（イ）左ノ文中ノ用言ヲ指摘シ、且ツソノ何形ナルカヲ示セ。

（1）志を遂げんと欲せば一刻を惜しみて勉勵すべし。

（2）山は高きを尊しとせず。

（用言は動詞と形容詞とのこと）。

（イ）

（1）遂げ（動詞。未然形）。欲せ（動詞、未然形）。惜しみ）動詞。連用形）。勉勵す（動詞終止形）

（2）高き（形容詞。連體形）。尊し（形容詞。

（ロ）終止形）。せ（動詞。未然形）。

（ロ）彼は英雄だ（指定）

僕は成功したい（希望）

明日は晴れるらしい（推量）

（）指定、希望、推量ノ口語助動詞ヲ用ヒテ文例各一ツヅツヲ作レ。

（臺北帝大農林專門部）

一、次ノ文カラ活用ノアル語ヲヌキ出シソノ活用ノシカタヲ示セ。

あるじ夫婦のなさけ心にしみてそぞろに別れ難き思ありしが何時まで留るべき身にもあらねば旅人は心強くも立ち去りけり。

（東京女子大）

一、

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
しみ	みま	む	む	め	め
別れ	れま	る	る	るれ	れよ
難き	きく	し	き	けれ	
あら	りら	り	る	れ	れ
し	き	し	き	しか	
留る	りる	る	る	れ	れ
べき	べく	べし	べき	べけれ	れ

二、次ノ語ニ「とも」「ども」ヲツケ假定ト既定トノ形ヲ示セ。

樂し。勉強す。櫻なり。行く。捨つ。

（東京女子大）

二、

假定	樂しく	勉強す
	櫻なり	行く
	捨つ	とも
既定	しけれ	すれ
	なれ	けれ
	つれ	ども

（參考）「しむ」は他動詞、例へば「香をたきしむ」といふやうな場合は下二段で、「メ、メ、ム、ムル、ムレ、メヨ」と活用する。

あ	ら	り	り	る	れ	れ
ね	ず	ず	ず	ぬ	ね	
強く	く	く	し	き	けれ	
立ち	た	ち	つ	つ	て	て
去り	ら	り	る	る	れ	れ
けり	ゆら		けり	ける	けれ	

一、（甲）

左ノ區別ヲ問フ

咲かなむ
咲きなむ
咲くなむ

（乙）

左ノ文ニ誤アラバ正シ且ツ其ノ理由ヲモ附セヨ

（イ）試驗に失敗するも慙じるに及ぶまじ

（ロ）任重ふして負荷に堪えず

（東京帝大農業教員養成所）

一、

動、未然　助
咲　か　なむ（咲いて貰ひたいといふ願望）

動、連用　助動（完了）未然形　助動（未來）終止形
咲　き　な　む（咲くだらうといふ推量）

動、連體　助
咲　く　なむ（係詞の「なむ」で、下に「嬉しき」といふやうな連體形の結詞が略されてゐる形。）

（イ）失敗するも慙じるに（假定を現すにはともを終止形に附ける。「慙づ」はダ行上二段活動詞である。じではサ行動詞となる）

（ロ）重ふして（重くしての音便）。堪えず（「堪ふ」はハ行下二段動詞であるから）

次ノ文中三ツノ「なむ」ニツキテ次ノ問ニ答ヘヨ。

（イ）（一）（二）ノ相違ヲ文法上ヨリ説明セヨ

（ロ）（三）ハ（一）（二）ノ何レニ同ジキカ。カツソノ理由ヲ文法上ヨリ述ベヨ。

（ハ）「山の端逃げて入れずもあらなむ」ヲ解釋セヨ。

十一日の月も入りなむ(一)とすればかの馬頭の詠める飽かなくにまだきも月の隱るるか山の端逃げて入れずもあらなむ(二)

親王に代り奉りて紀有常

おしなべて峰もたひらになりななむ(三)山の端なくば月も入らじを

（大阪外語）

（イ）

動連用形　助動（完了）　助動（未來）
入　り　な　む（「入る」の連用形について、「入るであらう」といふ推量の意を強くいふ形）

動未然形　助
あ　ら　なむ（「有り」の未然形について、「入れないで貰ひたいものだ」と願望の意を表す）

（ロ）（ニ）の願望を表す助詞の場合に同じ。

動、連用形　助動（完了）未然形　助
なり　な　なむ

（ハ）山の端よ、逃げて、月を入れないやうにして貰ひたいものだ。（他に對して願望を表す形）

一、左ノ文中ニアル「ぬ」「る」「申」ノ品詞名、及各組兩者ノ意味ノ相違ヲ示セ

イ　來ぬ人を待つ夕暮
　　鳥は無心に歸りゆきぬ

ロ　犬は太郎に打たる
　　父は謠曲を好まる

ハ　御願申候
　　一寸申添候

（小樽高商）

（イ）來ぬ人（打消助動詞。來ない人）
　　ゆきぬ（時の完了の助動詞。行つた）

（ロ）打たる（受身の助動詞。打たれる）
　　好まる（尊敬の助動詞。好みなさる）

（ハ）御願申候（尊敬の意を表す補助助動詞。助動詞と同じ性質である。御願いたしますの意。）
　　申添候（動詞。言ふの意）

一、左ノ文ニ誤アラバ之ヲ正シ其ノ理由ヲ述ベヨ

（イ）御見舞を辱ふし感謝に堪えず候

（イ）辱ふし（辱くしのう音便）。堪えず（ハ行下二段動詞）。

（ロ）旅ぢたくを整るあはただしく家を出づ。

（ロ）旅ぢたくを整るあはただしく家を出づ。（じたくといふ名詞が旅と熟語になる場合に連濁音でぢたくとなる。整へはハ行下二段動詞。あわただしはあわつといふ動詞と同じくわ）

（ハ）こういふ態度は學生として恥ずべきではなかろうか。

（ハ）こういふ（かくいふのう音便）。恥ずべき（恥づはダ行上二段動詞）。なかろう（無くあらうがつづまつた語である。無くあらう）

（二）左ノ（イ）（ロ）ノ文中、各々（1）（2）ノ符號ノ下ニ、假名ヲ並ベ記セルモノノ中、正シキ假名ヲ殘シテ他ヲ抹消シ、且ソノ理由ヲ記セ。理由ノ說明ハ、「……は、何行何段活用なるが故に」、又ハ「……は、原形何々が、何音便に轉じたるものなるが故に」トイフ如キ程度ニテヨロ

シイ。

(イ)此の家、北には松杉など植(1)へたる丘を負(2)へり。

(ロ)まことに有難(1)うふ(2)ございます。

（東京商大豫科）

植ゑたる　ワ行下二段活用なるが故に

負へり　ハ行四段活用なるが故に

有難うございます　有難くの音便なるが故に。ございますの音便なるが故に。

【講評】

この答案について、正答者の數から百分比を算出して、その大體の成績を見ることとした。その結果は左の如くである。

「植ゑたる」と正しく記した者。　五七%

理由の正しく言へたもの。　三七%

「負へり」と正しく記した者。　九四%

理由の正しく言へたもの。　六三%

「有難う」と正しく記した者。　九七%

理由の正しく言へたもの。　五九%

「ございます」と正しく記した者。　六九%

理由の正しく言へたもの。　三九%

「ワ行下二段活用」に屬する動詞は「植う」「飢う」「据う」の三語のみであることは、どの文法書にも書いてあり、教授者も常に生徒に言ひきかせてある筈であるのに、正記者は半數を僅に超ゆるのみであり、理由の正答者に至つては三分の一强に過ぎない。

この理由說明答案中に

「ヤ行下二段なるが故に　ゑ　の假名なり」

「ワ行下二段なるが故に　え　の假名なり」

といふ具合に、ア、ヤ、ワ、三行の所屬の假名につき、知識の不正確を暴露したものが一六%ある。中には「植ゑ」の　ゑ　を「ハ行」、「負へ」の　へ　を「ア行」又は「ワ行」といへるものさへある。けだし、ア、ヤ、ワ、三行の假名を平假名、片假名で書かしめた場合、現今の中等學校卒業者の少くとも約四割が何等かの誤をおかす事は、予が數次の實驗によつて信ずる所である。

「ございます」を「ござゐます」に誤つたものが多く、その理由の說明にも

「漢字で御座居ますと書く。而して居はワ行上一段なるか故にゐなり」と言つたものが、かなりある。これはかくの如き不當な當字と、不徹底なる文法知識に誤られたものである。「ございます」「なさります」「下さります」等の「り」が「い」に轉ずる音便は、日常の會話に、しきりに用ひられてゐるに拘らず、この點に心づいた者が約四割にすぎぬことは、どうしたことであらうか。

次ノ文中傍線ヲ施セル單語ノ品詞名ヲ示セ。中ニ就キ動詞ニハ活用ノ種類（何行何段活用又ハ何形變格等）ヲ併セ示スベシ。但シ活用表ヲ作ルニ及バズ。

此の頃のことぐさには、一たびいくさにかけあひ、家の子郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては、日本國を賜へ、もしは半國を賜ひても足るべからずなどぞ申すなる。まことにさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るるはしともなり、又朝威のかろ〳〵しさも推しはからるるものなり。言語は君子の樞機なりといへり。あからさまにも君をないがしろにし、人におごることはあるべからぬことにこそ。

（東京商大豫科）

（この問題は解釋を兼ねてゐるので、こゝにはやや文をちがへてあげておく）

死ぬる（動詞。ナ行變格）

やがて（副詞。）

なり（動詞。ラ行四段活用）

なり（助動詞。）

左ノ文中傍線ヲ施シタル助動詞ノ活用、接續

種類、活用及動詞トノ接續ニツキテ述ベヨ。

（イ）來し方行く末の事おもひやらる。

（ロ）人をして低回去る能はざらしむ。

（ハ）苗木を庭に植えさす。

（臺北醫專）

種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	接續
過去		き	し	しか			末然形に
打消	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ	未然形に
使役	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ	未然形に

（但し「さす」は四段、ナ變、ラ變には接續せず）

○「カ變」と「し」「しか」との接續については一五七頁參照。

左ノ文ニ誤アラバ、ソノ右側ニ正セ

彼は常に師のもとに通えるが、一度己が才の他にまされたるを賞せらるや、眞に喜びに堪えざるものの如く、愈々その學業に努めり。

（陸士豫科）

通へるが。まされたるを賞せらるや。堪へざる。努めり。

一、左ノ本文ニ就イテ、次ノ問ニ答ヘヨ。

一、

(1) 答はかくなりきトイフ、ソノ答ノ部分は如何。本文中ニ「　」ヲ附シテ之ヲ示セ。

(2) 次ノ語ノ主語ハ何カ。
語らはれて　思はば

(3) 次ノ語ヲ特ニ助動詞ニ注意シテ解釋セヨ
陣門に降るべし
如何ばかり美はしかるべき

(4) 施線ノ部分ヲ解釋セヨ

木曾は兵衛の佐に疎まれて、東國の討手はや途にあるに、強ひて院宣乞ひうけけれども、孤軍もとより勝算なし。乃ち使を西國に立て合體して、兵衛の佐討つべきよしを言ひ送りぬ。平家の答はかくなりき。よしや世は季になりぬとも、木曾なんどに語らはれて如何で

(1) 「よしや世は……御供にも加へらるべきか」

(2) 「語らはれて」の主語は「我等即ち平家の人々」
「思はば」の主語は「彼等即ち平家の人々」

(3)
○軍門に來つて降參するがよい(勸誘の意)。或は命令の「べし」として、降服せよと解釋してもいい。
○どんなに美しいであらう。(「べし」を推量として解釋すること)

(4) 略す。

(イ) よしや世は季になりぬとも……においては、「なりぬ」の「ぬ」(完了の時の助動詞が眼目である。「たとへ時勢は衰へてしまつたとしても」。

か都に上るべき。畏くも十善帝王、三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須く冑を脱ぎ弦をはづし、來りて陣門に降るべし。さらば、東國征討の御供にも加へらるべきかと。

ああ何ぞ其の言辭の堂堂として亡落のやからにたぐはざるや。平家人に乏しきも、一時の權變を弄びて頽勢を廻らさんとだに思はば、かかる時こそ乘ずべき機會なれ。さるを名分の正しきを執りて成敗の數をかへりみず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならんも、斯くして滅びんは、垢を含みて存らへんよりも如何ばかり美はしかるべき。

二、次ノ文ニ於テ片假名ノ部分ヲ漢字ニ改メ、且ツ、誤アラバ正セ。

國民の弱きは、彼等が自治心なき爲めなり。言換へれば、キュウすれば天をウラみ、人をトガめ、苦めばジキジバウし、コンすれば

(ロ) ああ何ぞ……たぐはざるや……においては、「何ぞたぐはざるや」といふ形に注意することが大切である。「や」は疑問、詠歎感動、反語の意に用ひられる助詞である。こゝは感動の意が一番強い。

(ハ) これには特は文法上注意すべきものは無い。「成敗の數」といふ語を知つて居るかどうかが眼目である。

二、
言換へれば(口語なら「換へれば」でいい)。
向ふて。　あるとも。
行うにあり。

他人に向ふてキウゴをサケぶ。かかるフガヒなき國民のシフガフにては、イクオクあるとも決して頼みとすべからず。自治心の要は、我が分内の事は、他のキヤウセイやクワンイウを俟たず、又、他のエンジヨやシダウをアフがず、我れ自らわが事を行うにあり。（陸士豫科）

窮、怨、咎、自棄自暴、困、救護、腑甲斐、集合、幾億、强制、勸誘、援助、指導、仰、

一、次ノ文ニ於テ、片假名ノ部分ヲ漢字ニ改メ、且ツ其ノ他ノ部分ニ誤アラバ正セ。

元來肉體のラウスキは、ヒフやキンニクがだん〳〵ダンセイを失つて行くといふ著しいトクチヨウによつて、割合に人の目につき易いようだが精神力のそれは、一般にセンサイな注意が拂はれていないやうに見へる。だからまだ四十を越さぬうちにもうタイホし始める者がある。これは主に青

（ロ）

行くという　易いようだが　いないやうに見へる

老衰、皮膚、筋肉、彈性、特徴、纖細、退歩、

年期のケウヤウを缺いてゐるからで、此の期に人間としてのソシツをキヨウコにすることが出來ず、爲にヴナウとシンザウとが直ぐに硬くなり、人間の成長がすぐ止り内にもえ出た多くのメは早くもシヲれてしまつたものである。

教養、素質、鞏固、頭腦、心臟、芽、萎、

一、左ニ掲ゲタルモノノ中文法上誤レルモノアラバ之ニ×ヲ附シ且正シキモノニ就キテハソレゾレ「り」ニ接續セル動詞ノ活用ノ種類及活用形ノ名稱ヲ記セ

迎へり　×迎へり
這へり　這へり（ハ行四段活用。已然形）
尋ねり　×尋ねり
死ねり　×死ねり
集めり　×集めり
射れり　×射れり

命ぜり　（海兵）

命ぜり（サ行變格、未然形）（完了の助動詞「り」は、四段とサ變とのみに附く。他には「たり」を附ける）

（三）左ノ文中、語法上ノ誤アラバ正セ。

讀書は體驗を豫想す。眞劍なる生活併せて嚴肅なる思索をなす人にとりてのみ讀書は效果あり讀書は吾人の體驗を補ひ能ふれど之に代ふることを得ず。讀書の意義を考へる時吾人は第一に此の事を記憶し置かざるべからず。（海機）

補ひ能ふれど。（能ふは「能はず」と打消の場合にのみ用ひられる語である。）

代ふることを（自動詞「代はる」はラ行四段「代ふる」はハ行下二段活の連體形で他動詞）考へる時。

左ノ文中ニ誤アラバ正セ。

イ、天下の學生をして、親しくかゝる士の教を受ける機會を與ふるを得れば如何ばかりの奬勵とやなるべき。

ロ、日本人は猶幾分の修練と困難とを經過せざれば果して大國民となる能はざるべし。然れども世界中に於て、忠誠の爲に一身を拋つこと土芥も啻ならざる民ありとせば何人もまづ指を日本國民に屈するを得ざるべし。（海機）

（イ）天下の學生をして、親しくかかる士の教を受ける機會を與ふるを得れば如何ばかりの奬勵とやなるべき。

（ロ）日本人は、猶幾分の修練と困難とを經過せざれば、果して大國民となる能はざるべし。然れども世界中において、忠誠の爲に一身を拋つこと土芥も啻ならざる民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈するを得ざるべし。

一、左記ノ中、誤レル箇所アラバ訂正シテソノ傍ニ記セ。

（イ）初時雨降れば山べぞ思ほゆれいづこかまづは紅葉するらむ

（イ）山べぞ思ほゆれ。（係結）

紅葉するらむ（「らむ」は終止形に附く。ラ變に

（ロ）若し少しにても心をゆるむれば忽ち他に惑はせられて、多年の苦心は全く水泡と消へ失せぬ。（海機）

左ノ文章ニツキ。

（イ）文法上誤アラバ其ノ右ニ之ヲ正セ。

（ロ）下二段活用ノ動詞ハ其ノ左ニ之ヲ指摘セヨ

事小なれども、若し其の是非選擇を辨え置かざれば恥ずることあるべしとて、禮を厚ふして教を乞ひたるに、師は聊も輕づるが如き色もなく、「此を取れ彼を捨て。」と懇に說きて、よく了解するを得せしめたり。（海兵・海經）

は連體形）

（ロ）若し……ゆるむ（め）れば。惑はせ（さ）られて。消へ（え）失せぬ（なん）。（或は「失せん」）

（イ）辨へ（へ）。恥ず（ず）ること。厚ふ（う）して。輕づ（んず）る色。彼を捨て（てよ）と。得せし（し）めたり。

（ロ）辨へ。捨て。得（下二段活は**エ列音にず**がつく）

左ノ文章中ニ文法上ノ誤アラバ其ノ右ニ之ヲ正セ。

イ、よく人を教えしかば、就ひて學ぶもの常に絶えず。

ロ、人如何に笑うとも、自ら守る所堅く行道に違はずば何の恥ずる事かこれあらん。

ハ、老いて後悔ゆこと勿れ。（海兵・海經）

（イ）教えしかば（へ）。就ひて（い）。絶えず（ざりき）。（絶えずを歷史的現在と見て、そのままにしておいてもよい）

（ロ）笑うとも（ふ）。恥ず（ず）る。

（ハ）悔ゆ（ゆる）こと。

一、左ノ文章中ニ文法上ノ誤アラバ其ノ右ニ之ヲ正セ。

「月の夜半こそ思う隈もなく、心の底も澄みわたりぬるものなり。されど闇の夜の空晴れて星の

思う（ふ）。

光さやかなるに、風高ふ吹きかふは又さるやうにぞおぼゆ」といえば、「雨こそいとまさりぬるを」とある人いふ。

（海經）

ものなり。（上にこその係があるからなれと已然形で結ぶ）

高ふ。

おぼゆ。（ぞの係に對しては連體形で結ぶ）

いえば

六　單語篇

國文法を嫌ふ原因の一つは、たしかに面倒臭いといふことであらう。元來學者が物を言ふ場合とか一冊の本にまとめる場合とかには、何もかも、細大漏らさず言ふといふ癖がある。學問を組織立てる上からは當然のことであるが、實用的にはコウルサイことが多い。從來の文法書にはそれが多い。本書はそれを避けて、急所を明瞭にするといふことに重きをおく。從つて、文法學者にとつては興味のある穿鑿でも、素人にはウルサイといふやうな部分は、あつさりとパスし、或は無視して通ることにする。例へば文とは何かといふやうなこと、口語文とは何かといふやうなことは省略する。そんなことは少くとも入學試驗には出ないから。それに教科書にもあり、英文法の方でもやるのだから。

一　五十音圖を明瞭に知れ

五十音圖

ア　ヤ、ワの三行

まづ五十音圖、即ちアイウエオの表を完全におぼえること。なあんだ小學生ちやあるまいしといふ人の恐らく何割かは、きつと書けないであらう。試みに兄さんや友人にやらせて見たまへ。その中でも、アヤワの三行が問題である。平假名、片假名で完全に書けるやうにしておくこと。これが國文法學習の第一歩で、一番大事なことである。

次の動詞の活用を書けといふやうな問題なら、大抵この三行に關係あるものと見てよからう。

得(う)　見ゆ　老ゆ　居る

これらはいづれもそれである。

あ　い　う　え　お　　ア　イ　ウ　エ　オ

や　い　ゆ　え　よ　　ヤ　イ　ユ　エ　ヨ

わ　ゐ　う　ゑ　を　　ワ　ヰ　ウ　エ　ヲ

行と列　これは說明中に用ひられる言葉であるが、サ行とかタ行とか、それはわかるとして、エ列音とか、ウ列音とかいふことを知らねばならぬ。五十音圖を縱(タテ)に見る場合が行で、横に見る場合が列である。エ列音といへば「エケセテネヘメエレエ」であり、イ列音といへば「イキシチニヒミイリヰ」である。

……TA……KA　A(あ)

……TI……KI　I(い)

……TU……KU　U(う)

……TE……KE　E(え)

……TO……KO　O(お)

かやうにローマ字にしてみると、ア列音、イ列音、といふことがよくわかる。

「ア列音にズのつく動詞は四段活用である」

などといふ時に、何のことかと迷つてゐるやうではいけない。

二　單語と品詞

ま。や。

これは二個の文字である。

やま

これは一個の單語である。

ま、や、はさういふ音聲を記錄する符號にすぎないが、やまは一つの意味を表してゐる。文法の教科書を見ると、「一つ一つの思想を表はす言葉を單語といふ」などと定義してある。

あれ　は　やま　だ

この文は四個の單語で出來てゐる。この中の　は　だ　の二つは、この文から離してみると、格別意味が無い。文字にすぎない。ところが「これ」「やま」などは、それだけでも意味を持つた單語である。つまり獨立する單語であり、「は」「だ」などは附屬

單語

獨立する語
附屬する語

してはじめて單語である。

文章を、獨立する語と附屬する語とに、バラ〳〵にすることが單語に分解することである。

講評の中に、品詞に分解せよといふ問題を、單語に分解してすましこんでゐる者がある、つまり單語と品詞との區別を知らぬ者があると言つてあるが、兩者のどこがちがふのか。

單語と品詞との區別を知れ

單語のあらはす意味はそれ〴〵ちがふ。そのやうに、いろ〳〵な性質、はたらき、內容を持つた單語を、その種類によつてそれ〴〵に區別して與へた名が品詞である。

品詞

「品」は種類、性質といふ意味である。

品詞に分解する場合は、先づ單語に分けておいて、その一つ一つに、それ〴〵の名を與へて行かねばならぬ。

品詞の種類

品詞の種類は、十ともいひ九ともいふ。つまり數詞を名詞の中に含ませれば九、獨立させれば十となる。

名詞。（數詞）。　代名詞。　動　詞。　形容詞。　副　詞。
接續詞。　感動詞。　助動詞。　助　詞。

形容動詞を動詞の中に含めず獨立させれば十一品詞となる。かやうに說のわかれてゐることは受驗者などには迷惑であるが、目下のところいたし方無い。但し「品詞名を列擧せよ」とか「品詞は幾つか」などといふマル暗記式の問題は今後餘り出ないと見ていい。

試みにこの品詞全部を一つの文章中に含ませた文を作つてみるがいい。苦心して作つてみれば忘れない。「名詞とは……」なんかと定義など暗記してゐるより、その方が實力がつく。

文を品詞に分解するといふ問題、或は分解して傍線を施してあるものに品詞名を記せといふ問題は、文語文にも口語文にも、やや多く出てゐる。これは文を解釋するにも根本的に必要な方法であるから、今後も多く出題されるものと考へてよからう。その中でも副詞と接續詞、助動詞などが注意すべきものである。

三　體言と用言

體言

名詞と數詞と代名詞とをあはせて體言といふ。

體は本體とか物體とかいふ意味の體で、「物」といふことである。文法書に「體言ハ事物ノ名ヲアラハス言葉、即チ名詞ト、事物ヲ指シ示シテ呼ブ言葉、卽チ代名詞トヲアハセテイフ」などと定義してある。「事」は戰爭とか運動會といふ事柄であり、「物」は山とか草とか蟲とかいふ一切の物のことである。

體言の特徵

體言には活用が無い。しかして、主語になることが多い。

用言

動詞と形容詞とをあはせて用言といふ。

用言は動作存在性質狀態等を述べる言葉で、活用のある語といふ意味である。

用言の特徴

用言は活用があり、しかして述語となることが多い。

活用形の中の連用形は、用言に連續する語形といふ意味であり、連體形は、體言に連續する語形といふ意味である。體言、用言といふ語は、常に用ひられるのであるから、よく理解しておく必要がある。

連體形　はげしき　體言　たたかひ
連用形　はげしく　用言　たたかふ

四　名　詞

名詞の定義

この世には戰爭といふ名で呼ばれる事柄があり、水といふ名で呼ばれる物がある。かやうに、事物の名をあらはす言葉を名詞といふ。

名詞の分類

英語などでは名詞を固有名詞、物質名詞、抽象名詞などと分類するが、日本文法にはその必要が無い。英文では固有名詞の最初には頭文字をおくとか、物質名詞には冠詞をつけないとか、いろ〳〵な約束があるが、國文には何もさういふことが無い。けれども今日でも普通名詞と固有名詞とに分けた本が多い。

轉成名詞

名詞には口語と文語との區別が無い。

複數名詞

霞むといふ動詞がかすみといふ名詞となり、酸しといふ形容詞から鮨といふ名詞が出來るといふやうな、いはゆる轉成名詞の例は、品詞の轉成のところに說く。

名詞を複數にする語法。

諸國（接頭語）
生徒たち。子供ら。（接尾語）
村々。國々。（重語）

五　數　詞

數詞の定義

數量、順序などをあらはす語を數詞といふ。

百里の道も一歩より始まる。（數量）

原數詞
序數詞

一番星みつけた。三人目の子がさう言つた。（順序）

數詞を獨立させず名詞の中に含めてゐる本がいくらでもある。さうかと思ふと、數量をあらはすものには原數詞といふ名を與へ、順序を示すものには序數詞などといふ名る與へたりしてゐる本もある。

六　代名詞

代名詞の定義

桃太郎は鬼が島に行つた……（名詞）
彼はそこに行つた……（代名詞）

代名詞は、名詞（或は數詞）の代りに用ひる語である。

この定義のしかたについて、「いやさうでない。代名詞は事物をそれと指し示して言ふ言葉である」などともいふ。嚴密な學問上の穿鑿はともあれ、「名詞の代り」といへば代名詞といふ語に一番手早く當り、且つ事實上の間違ともいへないから、それでいい。すべて定義など暗記するとか餘り細かなことに沒頭するのは、少くとも受驗生などにはつまらぬことだ。

代名詞の二種

人代名詞は人名に代る語。
指示代名詞は事物、場所、方向等の名に代る語。

人代名詞の例

人代名詞		
自稱	われ（わ） 僕 拙者 小生 等	
對稱	汝 君 貴殿 あなた 等	
他稱	近稱	この方（たた） その人 等
	中稱	その方（たた） その人 等
	遠稱	彼 あの方（たた） あの人 等
不定稱		誰（たた） どの方 どの人 どなた 等

自稱＝一人稱
對稱＝二人稱
他稱＝三人稱

わが家。なが家。
このがは助詞である。

指示代名詞の例

指示代名詞		
事物	近稱	こ これ
	中稱	そ それ
	遠稱	か。かれ あ。あれ
		いづれ どれ
場所	近稱	ここ
	中稱	そこ
	遠稱	かしこ あそこ
		いづこ どこ
方向	近稱	こち こなた こつち こちら 等
	中稱	そち そなた そつち そちら 等
	遠稱	あち あなた かなた あつち あちら 等
		いづち いづかた どつち どちら 等

この、その、かの、あの、どのこれらのはいづれも助詞である。

七　動　詞

動詞の定義

事物の動作（泣く。吹く等）、存在（居り。在り等）を表す語を動詞といふ。

語根、語尾

動詞には語根と語尾との區別がある。語根は語幹とも呼ばれる。

吹く。　ひらく。

語根は活用せぬ部分、語尾は活用する部分である。

語根語尾の區別の出來ぬ動詞

語根と語尾との區別の出來ない動詞もある。

來（く）　爲（す）　經（ふ）　得（う）

などである。

語尾を假名にすること

動詞を漢字で書く場合には、語尾だけは假名であらはす。

『出來るだけ早く集ること』

かういふ場合「あつ」の部分だけを漢字にして、語尾の「める」「まる」は假名にしないと「集める」のか「集まる」のか意味が通らぬことになる。

（注意）

講評中にも再三言はれてゐるが、

ここに置け

といふやうな場合の「け」の說明に、「置クトイフ動詞ノ命令形デアル」といふのは誤りで、「置クトイフ動詞ノ命令形ノ語尾デアル」とすべきである。「おけ」全體が命令形で「け」だけは語尾であることに注意。

「誤」を「あやまり」と名詞に讀む場合、語尾の「り」を記入するかどうか。「光」を名詞に讀ます場合に「光り」としないのだから、「誤」も「誤り」としない方がいいともいへる。しかし「この車は走りが惡い」といふ時「走が惡い」では讀みにくい。讀みにくいと思ふもの、迷ひやすいと思ふものには語尾の假名を入れるがよろしい。

一　動詞の活用

活用の意義

動詞の活用は、動詞がいろ〳〵の異つた意味をあらはすためにとる形の變化である。

活用形

未然形　連用形　終止形　連體形　已然形　命令形

この六つを明瞭におぼえること。これが文法學習の根柢になるものである。

未然形

未然形。

「イマダ然ラザル形」といふ意味の名である。

花咲かす。（花が咲かない）

鳥鳴かむ。（鳥が鳴かう）

花落ちむ。（花が落ちよう）

これらはいづれもまだ「咲く」「鳴く」「落つ」といふ動作の行はれてゐない場合を示してゐる。「す、む、う、よう、ない」等の助動詞のつくのが特徴である。

連用形

連用形

用言につづく形といふ意味の名である。

花咲き（用言）たり。（花が咲い（用言）た）

鳥鳴き（用言）しきる。

「たり、た」は助動詞。「しきる」は動詞。いづれも活用言である。

終止形

終止形

言ひ切る時の形、文の終止する時の形といふ意味で、動詞をあげる場合は、この終止形を用ひるのが常である。つまり動詞の本體、本形である。

連體形

連體形

體言につづく形といふ意味の名である。

咲く（體言）花。

已然形

已然形（イゼン）

「已（スデ）ニ然ル形」である。動作をはじめから行はれるものとして言ふ形である。形の上からいふと、「ば」「ども」のつくところである。

誤アレバ正セ

かういふ場合であつて、口語にすると「誤があるから」である。「誤アレドモ正サズ」は「誤があるけれども」である。誤のあるといふ事實は已に確定してゐるものとして言ふ形である。口語で「誤があれ（已然）ば　正す」といふ場合は假定の意になるから、假定形といふ。

（假定形）

命令形

命令形

これは「よ」「ろ」などのつく形で、命令の意を表す形。

活用形の記憶法

動詞を以上の六形にあてはめて活用させることが自由に出來るやうになつてゐないといけない。それにはいろ〳〵な記憶法があらうが、普通次のやうにする。

未然形——ず或はむのつく形——飛ばず。開かむ。
連用形——たりのつく形——飛びたり。開きたり。
終止形——句點「。」のつく形——飛ぶ。開く。
連體形——もののつく形——飛ぶもの。開くもの。
已然形——ばどものつく形——飛べども。開けども。
命令形——よのつく形——飛べよ。開けよ。

これを「**ず、たり、○(マル)、もの、ども、命令**」と口癖のやうに覺えてしまふといい。

「ず、たり、○(マル)、もの、ども、命令」。さてこれにあてはめて
射らズ、射りタリ、射る。射るモノ、射れドモ、射れ、
と活用させたらどうか。更に、
蹴らズ、蹴りタリ、蹴る。蹴るモノ、蹴れドモ、蹴れ

としたらどうか。たしかに活用六形は出來るが、言葉そのものは誤つてゐる。「蹴らず」とか「射らず」とかいふ語は無い。「射ず」「蹴ず」といふのが正しいといふことを知らぬからである。つまり平素正しい言葉づかひを覺えておかぬと、暗記法も役に立たぬ場合がある。

假定法と確定法

口語では、「ず、たり、○、もの、ども、命令」の代りに、
「ない、たい、○、もの、ば、命令」
とするがよい。

未然形——飛ばない。開かない。
連用形——飛びたい。開きたい。
終止形——飛ぶ。開く。
連體形——飛ぶもの。開くもの。
假定形——飛べば。開けば。
命令形——飛べ。開け。

花咲かば見に行かむ
花咲けば見に行く

この二つを口語にすると、

花が咲いたら見に行かう。

花が咲くから見に行く

である。一方は假定の條件を示して「咲かば」といひ、一方は確定の條件を示して「咲けば」といふ。前者は未然形であり、後者は已然形である。この二者の區別は、文語文において注意すべきものである。

口語の假定法

口語では

花が咲け　ば　春だ

と言つても、確定でなく假定の意を表すから假定形と呼ぶ。

活用形をいへ

試驗問題で

「次ノ文中の動詞ノ活用ヲ示セ」といはれたら活用六形を記す。

活用形の名をいへ

「次ノ文中ノ活用形ノ名ヲイヘ」といふ問題であつたら、そこに用ひられてゐるのは何形であるかを答へるのである。

汽車走り行きたり

かういふ問題で

走り行	
ら	末然形
り	連用形
る	終止形
る	連體形
れ	已然形
れ	命令形
け	
け	

と答へるのは活用形であり、

走り（連用形）

行き（連用形）

と答へるのは活用形の名である。

二　動詞活用の種類

動詞活用の種類

動詞の活用には次の種類がある。

（文語）　四段活用　上二段活用

（口語）　四段活用

下二段活用　上一段活用
上一段活用　下一段活用
下一段活用　カ行變格活用
サ行變格活用　サ行變格活用
ナ行變格活用
ラ行變格活用

暗記すべき文語動詞

上一段活
着る　似る　煮る　干る　鑄る　射る
ひきゐる　ゐる　見る（おもんみる、かんがみる、かへりみる、こころみる）
うらみる、

下一段活
蹴る

カ變
來（く）

	ズ	タリ	○	モノ	ドモ	
未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ
來	こ	き	く	くる	くれ	こ
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
す	せ	し	す	する	すれ	せ
あり	ら	り	り	る	れ	れ

ナ變
死ぬ　往（い）ぬ

サ變
す　おはす

ラ變
あり　をり　はべり

文法は推理的に行くべきものであるが、基礎となる部分には暗記を必要とするものがある。これらの活用形は、お寺の小坊主が經文を暗記する位なつもりで、一種の口調をもつて暗誦して居れば自然一生涯忘れないものとなつて頭に殘るから、是非暗誦暗記すること。

以上少數動詞さへ特別に覺えてしまへば、あとは全動詞が次の規則にあてはめられる。

ア列音に**ズ**のつくは四段活——書かズ　走らズ
イ列音に**ズ**のつくは上二段——起きズ　閉ぢズ
エ列音に**ズ**のつくは下二段——受けズ　止めズ

この活用形も、こゝにあげた「書く、起く、受く」といふやうな動詞を代表者として一定の型を暗記してしまへば、他はそれにあてはめさへすればいい。

書	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
起	か	き	く	く	け	け
受	け	き	く	くる	くれ	きよ
	け	き	く	くる	くれ	けよ

母韻であらはしてみると次の通りである

四段	上二	下二
A	I	E
I	I	E
U	U	U
U（る）	U（る）	U
E	U（れ）	U（れ）
E	I（よ）	E（よ）

國文法第一の必要事

どういふ暗記法を工夫するにせよ、いかなる推理法によつて記憶するなり、とにかく動詞の活用が自由にあやつれることが、國文法學習の根幹をなすものであるから、何よりも先づここに努力することが肝要である。

口語動詞活用の種類

口語動詞と文語動詞との活用の種類を比較してみる。

（文語）　（口語）

上二段 } ——上一段　（文、上二）（口、上一）　起　き　き　く　くる　くれ　きよ　き　き　きる　きる　きれ　きろ

上一段

下二歌 } ——下一段　（文、下二）（口、下一）　受　け　け　く　くる　くれ　けよ　け　け　ける　ける　けれ　けろ

下一段

（文、ナ變）（口、四）　死　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね

四段 } ——四段　（文、ラ變）（口、四）　居　ら　り　る　れ　れ　ら　り　る　る　れ　れ

ナ變

ラ變

カ變 ——カ變　（文、カ變）（口、カ變）　來　こ　き　く　くる　くれ　こい　こ　き　く　くる　くれ　こい

サ變 ——サ變　（文、サ變）（口、サ變）　せ　し　す　する　すれ　せよ　せ　し　す　する　すれ　しろ

注意すべき假名遣の動詞

動詞の假名づかひの誤を正させる問題はかなり多い。

や行の動詞（終止形が**ゆ**の動詞）

い　老い　報い　悔い

え　癒え　消え　冷え　榮え　越え　燃え　等

わ行の動詞（終止形**う**）

る　植る　据る　飢る　等

は行の動詞（終止形**ふ**）

へ　教へ　唱へ　數へ　等

すと**づ**

終止形の**す**の動詞は、「混す」「こす」（木の根など掘ること）と、サ變の動詞、「信

じ
ち

す」、「輕んず」「報ず」等である。

他は大抵づ。

閉づ　恥づ　撫づ　攀づ　出づ　等

從つてこれらの未然形、連用形、連體形、命令形はいづれも、ち、づるを用ふべきである。「恥じたり」「閉じよ」「出ずる」などとしては落第である。

このほか語根と語尾と區別出來ない動詞もその活用をあやまりやすい。

得(う)　經(ふ)　等

八　形容詞

形容詞の定義

形容詞は事物の狀態（高し、深し等）性質（善し、惡し等）をあらはす語である。

形容詞の活用形

形容詞は命令形が無いだけで、動詞と同じ活用形をもつてゐる。

	文語	口語
未然形	道遠くば行かじ	道が遠ければ行かない
連用形	道遠くつづく	道が遠くつづく
終止形	道遠し	道が遠い
連體形	遠き道	遠い道
已然形	道遠ければ行かず	(假定形)道が遠ければ行かない

口語の未然形を假定形に合併させ、未然形をあげない本が多い。形が全く同じだからである。

形容詞活用形の二種

形用詞の活用にはク活とシク活と二種ある。

ク活
シク活

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	
遠	く	く	し	き	けれ	ク活
苦	しく	しく	し	しき	しけれ	シク活

ク活、シク活の辨別法

ク活かシク活かを見分けるには、連用形がよい。例へば「思ふ」といふ用言を接續させる場合に「……しく思ふ」といふ形容詞はすべてシク活である。

遠く思ふ（ク活）

美しく思ふ（シク活）

九　形容動詞

形容動詞の構成

道遠かりければ……

かういふ文で、「遠かり」といふ語はいかなる品詞であるか。これを

遠く	形	あり	動	け	助動	れ	助	ば

とすれば明瞭であるが、「遠かり」を一つの品詞と見て、形容詞と動詞との合したもの即ち形容動詞であるといふ見方をする本が多い。即ち

遠く（か）あり＝遠かり

といふ構成による一品詞であると云ふのである。これと同種のものは、次の二つである

形容動詞の種類

うららかに（な）あり＝うららかなり
副　動

泰然と（た）あり＝泰然たり
副　動

これら「遠かり」「うららかなり」「泰然たり」を形容動詞と名づけるのである。活用は全くラ變「有り」と同じである。

カリ活
ナリ活
タリ活

種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
カリ活、或は、形容動詞第一種	から	かり	かり	かる	かれ	かれ
ナリ活、或は、形容動詞第二種	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
タリ活、或は、形容動詞第三種	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

遠
うららか
泰然

一〇　音便

音便の定義

、言語の音が、發音の便宜上、他の音に變ることを音便といふ。

い音便

突きて……突いて
殺ぎて……殺いで
久しき……久しい
ございます……ございます
指して……指いて

かやうに、き、ぎ、し、り、が　い　に轉ずるのをい音便といふ。

う音便

食ひて……食うて
久しく……久しう
高く……高う

かやうに、ひ、く、が　う　に轉ずるのをう音便といふ。

撥音便

死にて……死んで
運びて……運んで
富みて……富んで

に、び、み　が　ん　に轉ずるのを撥音便といふ。（撥は、はねるといふ意）

促音便

勝ちて……勝つて
折りて……折つて
舞ひて……舞つて

（ち、り、ひ が つ に轉ずるのを促音便といふ（促は、つまること）

音便の假名づかひに關する問題は好んで出題されるから、よく覺えておく必要がある。その中でも「う音便」は最も注意を要する。

一一　副　詞

副詞の定義

副詞は動詞・形容詞、又は他の副詞の上にあつて、その意義を限定する語である。

たちまち（副）飛ぶ（動）。　かへつて（副）苦しい（形）。　ただ（副）ひたすら（副）祈る（動）。

限定するといふことの意味

限定するとは、その程度、範圍、等を示すことである。即ち、いつの事であるかといふ時を示し、場所を示し、どの位といふ程度、どんな樣子かといふ狀態、等を示す語である。

ただ今行く（時）。いつ出立するか（時）。
前に立つ（場所）。左に曲がる（場所、方向）。
非常に苦しい（程度）。わづかに聞える（程度）。
早く飛ぶ（狀態）。うららかに晴れる（狀態）。

本來の副詞

副詞は他の品詞がつとめることが多い。元來の副詞は、

いと　ただ　もつぱら　かく　なほ　みな　もつとも　ゆめ（決して）　必ず
たちまち　まづ　もし　けだし　いささか　およそ　かへつて　あに　いづくん
ぞ　いかで　まさに　よも　いさ　あに　ほぼ　ひたすら　およそ　等である

轉來の副詞

形容詞・形容動詞が副詞となるもの

よく　正しく　靜かに　悠然と　等

動詞が副詞になるもの

定めて　極めて　恐らく　覺えず　見す〳〵　泣く〳〵　たとひ　從つて　等

名詞・代名詞が副詞になるもの

今　古　昔　去年　いくら　いくつ　幸に　いづれ　いつ　こゝに　まことに
等

一二　接　續　詞

接續詞の定義

接續詞は語や句をつなぐ言葉である。

並列添加の意

接續詞は次のやうな場合に用ひられる。

（1）「それから」「また」といふやうに物事を加へて言つたり並べて言つたりする場

接續詞

選擇の意の接續詞

順說の場合の接續詞

逆說の場合の接續詞

副詞と接續詞との區別

合。

また　なほ　かつ　及び　そして　それから　それに　等

(2)「或は」「それとも」といふやうに、物事を選擇する意を表す場合

はた　又は　或は　もしくは　それとも　等

(3)「だからして」といふ意を表すもの。上と下との事柄が順當につながる場合。

故に　されば　さらば　因つて　したがつて　あひだ(御座候間)。だから　それで　すると　等

(4)「ところが」「けれども」といふやうに、上と下とにくひちがひがある場合、物事が逆に行く場合に用ひるもの

但し　然るに　されど　しかれども　けれども　だが　でも　ところが　等

副詞と接續詞とは區別のつかぬ場合がある。しかし大體において、副詞はその位置をかへてみても意味は通じるが、接續詞は、その場所を動かすと意味が通じなくなるものである。

山また山と越えて行く（接續詞）

また山を越えた——山をまた越えた——山を越えた。また。（副詞）

談じかつ笑ふ（接續詞）

かつ談じかつ笑ふ（副詞）

感動詞の意義

獨立語

かな。よ。や

助動詞の意義

一三　感動詞

感動の意をあらはす語

ああ　あな　あはれ　あつぱれ　すは　やよ　いかに　いで　いざ　あはや　あら　やあ　おい　さあ

等は感動詞である。

感動詞は文のはじめにおかれ、文の成分の中に加はらず、獨立語として取扱はれる。

文の終に來る「かな」「よ」「や」などは感動の意をあらはす語であるが、今日では附屬する言葉として、助詞の中に入れられてゐる。

一四　助動詞

助動詞は、その名の示すが如く動詞を助ける言葉である。動詞の意義を完全にあらはすために添へる語である。但し動詞以外の言葉、即ち體言、形容詞にも添ひ、助動詞相互にも接續する。

言ひ（動）ぬ（助動）。

言は（動）　せ（助動）　たり（助動）。

山（名）　なり（助動）。

山高き（形）　なり（助動）。

助動詞が添うて表す意味には、次のやうな種類がある。

受身（殺さる。弑せらる）

可能（英文も讀まる。午前四時にも起きらる。一日に十里行くべし）

可能の中で、「その物語のあはれさに誰　涙ぐまれる」といふやうな場合は、自然にさうなるといふ意味であるから、**自發**とか**自然可能**とか名づけて區別してゐる。べしは推量に入れられる。

使役（早く歩ます。早く起きさす。早く歩ましむ）

尊敬（父は役所に行かる。午後は散歩せらる。）

助動詞の種類
受身
可能
自發
使役
尊敬

このほかに使役と同じくす　さす　しむを用ひるが、それは多くの場合、次のやうな形をとる。

丘上に立たせらる。勉勵せさせ給ふ。御位に即かしめ給ふ。

打消（さにあらず。行かざりき。）

このほかに、推量の意を持つ打消　じ　まじ　がある。「花咲かじ。行くまじ」

時（時には過去と未來と完了とある。未來はむであるから簡單であるが、過去と完了とは區別に注意する必要がある）

昨日書き（過去）し手紙を今出し（完了）たり。

完了は動作の完了をあらはすといふ意味の名である。

名を牛若と呼びけり（過去）

名を牛若と呼びたり（完了）

この二つ、どちらも過去ではないかといへば、さうも思はれるが、たりの方は、過去の事實について、「呼ぶ」といふ動作の完了してゐたことを示すものである。これを口語にする場合

打消
時
未來
過去
完了

牛若と呼んだ（過去）
牛若と呼んでゐた（完了）

といふやうにすれば、その感じが出る。

さて完了の助動詞は「つ」「ぬ」「たり」「り」であり、過去の助動詞は「き」「けり」である。

推量

む　らむ　めり　らし　まし　べし　けむ

（花咲かむ）　（花咲くらむ。）　（人毎にいふめり。）　（花咲くらし。早く起くらし）　（誰か知らまし。花散らざらましを）　（我も行くべし。樂しかるべし）　（いつの事なりけむ。……過去の推量）

指定

なり（日本は神國なり。これを君子といふなり）
たり（日本は神國たり。彼は大將たり）

指定のたりは體言に添ふ。

神國と言ひ（助）たり（完了）。　體言 神國 たり（指定）

願望（希望）

たし（見たし聞きたし。）　まほし（見まほし。聞かまほし）

咏歎

比況

咏歎

なり（落ち來る水の音すなり。）
けり（見ゆるかざりは櫻なりけり）

落ち來る水の音する　連體形 なり　指定
……音す　終止形 咏歎 なり

この區別を忘れぬこと。

比況

ごとし（飛ぶごとし。山のごとし）

右の中で、なり（指定、咏歎）けり（過去、咏歎）たり（完了、指定）、る、らる（受身、可能、尊敬）す、さす、しむ（使役、尊敬）等は、その意味をよく考へて區別する必要がある。

國文解釋にあたつて、助動詞の意味をなほざりにすることが共通の大弊害であると講評中にも、實にしば〳〵くりかへされてゐることを忘れてはならぬ。

助動詞には動詞形容的と同じく活用形がある。又、動詞その他に接續するには一定の法則がある。これらは一括して表に示す。

る、らる、す、さす、しむ、
しむ
らる
べし
に、し、ぬ、しか

一五　注意すべき助動詞

これらの助動詞中、特に試驗の際好んで問題とされるものをあげておく。

(1) る、らる、す、さす、しむ、
これらが受身として用ひられてゐるか、可能か、尊敬か使役かといふことをよく判斷すること。

(2) 得|せ　し|むといふ語法は許容されてゐるが、しかし誤として訂正を要求される出題が時々あるから、得|し|むといふ正しい形を常用すること。

(3) サ變格の動詞、賞す、罰す、許容す、等は、賞せらる、罰せらる、許容せらるといふやうに、未然形にらるが附くのである。賞さる、許容さる、等といふのは誤用である。

(4) べし。可能か（自發とか自然可能とかことわるべき場合もある）推量か（或は命令か）を判斷すること。なほ、「捨てべからず」とか「受けべし」とかいふ接續法の誤を訂正する問題が多い。ラ變以外は終止形に附く。

(5) 完了の助動詞は解釋の際に注意して、等閑視せぬこと。なほその活用中のに|し　ぬ　しかが紛れやすい品詞の問題としてしば〳〵出題される。

(6) きの接續。

き
し
しか

過去の助動詞き|し　し|しかは連用形に附くが、カ變とサ變とには例外がある。

未然形	連用形	終止形
來。	こし しか	き し しか
爲。 おはす。	せし しか	し
	し	く
		す

し、しかが未然形にも附く。きがどこへも附かぬ。
し、しかが未然形にだけ附く。きはどこへも附かぬ。

從つて次のやうな問題がよく出される。どちらが正しいかといふのである。

電報を發せしが
電報を發ししが

こころざせしが
こころざししが

「發す」はサ變であるから「發せ|し|が」が正しく、「志す」は四段活であるから、その連用形「し」に附いて「志し|し|が」といふが正しい。

(7) りの接續。
これも實に好んで出題されるものである。りが四段活とサ變とだけに接續することを固く記憶せよ。
受けり。倒れり。

けり
ぬ
ね
なり
らし

これらはいづれも上二段活に附いた誤用例である。

(8) けりが過去と咏歎の場合と同じであるから、前後でよく判斷すること。

(9) 完了のぬと打消のぬ。

花散りぬ（散り 連用形 ぬ 完了）。花ぞ散らぬ（散ら 未然形 ぬ 打消）。

(10) ね。

ずの已然形で打消であることを解釋の際に忘れやすい。「人こそ知らね」といふやうにこその結びの語となつてゐることが多い。

(11) なり。

指定の場合と咏歎の場合とを區別すること。

(12) らし。

推量の場合と接尾語の場合と區別すること。「雨降るらし 推量」「子供らし 接尾語」

(13) 口語の助動詞をおぼえておくこと。

マス。タ。ウ。ヨウ。ナイ。ダ。デス。等。ヤウダ。サウダ を一つの助動詞としてある本も多い。活用、接續はダに準ずる。

これらの中で、次のやうに二つの助動詞とすべきを一つに誤ることが多い。

マシタ。デセウ。ダツタ。

ない 形容詞 助動詞
ウ
ヨウ

ところがデセウを一語として扱つてゐるやうな本もあるのであるが、文法にはまださういふ過渡時代的な不統一が、しば〳〵ある。これは受驗者には迷惑千萬であるが、よく道理に合つたと思ふものに從つて明かにしておくよりほかいたしかたがない。

山が高くない（形容詞）
山に登らない（助動詞）

こんな場合はよくわかるが、十一年度の一高の問題のやうに、

さうでないかも知れない

といふやうなのは、學者でも迷ふであらう。大體として、助動詞のないの前には助詞のはが入らぬと記憶していい。形容詞の場合は入る。

高くはない。さうではない。

即ち助動詞のないは直ちに動詞に接續する。

(14) 文語のむにあたる口語の假名づかひウ ヨウを誤らぬこと。

(15) 敬語の助動詞

敬意をあらはす助動詞は、る、らる、す、さす、しむ等があげられてゐるが、そのほかに、給ふ 申す 致す 候ふ 侍り 奉る 等といふ動詞から轉じたものがある。これらも動詞としての生命を失つてゐるのであるから助動詞と見られる。敬語

の補助助動詞とでも言つたらよからう。

助詞

助詞の意義

助詞はいろ〳〵な品詞の間に入つて、意味をあらはすことを助ける言葉である。

助詞はいろ〳〵な意味をあらはす語であるから、これを十分に理解しないと、文の意味のわからぬ場合が多い。但し口語文に於ては、自然に記憶され、間違なく使用されてゐるものが多いが、文語文、殊に古文の解釋にあたつては、助詞の正確な知識が必要である。

これを接續法により、或は表す意味によつて分類してある本が多いが、こゝには雜然とあげて行く。要するに分類整頓よりも一語一語をよく覺えることが必要であり、數もさまで多くないから、分類に骨折ることもあるまい。

に

に

大阪**に**住む。上海**に**行く（場所・地點を示す）

このほか「汽車**に**乘る」「八時**に**着く」「これ**に**まさる」などといふやうに、比較の意味、副詞の意味などを表すに用ひる。

へ

にと**へ**の區別

と

との省略すべからざる例

とは終止形に接續す

な

な（禁止）は終止形に附

へ

南**へ**去る。東京**へ**行く（方向を示す）

文語文では**に**と**へ**と區別する。**に**は場所を明瞭に示し、**へ**は方向をあらはす。從つて「九時旅舍**へ**着きたり」などといふ場合は「**に**」とすべきである。

と

蜜柑**と**柿**と**梨を貰ふ（物を並べて言ふ時に用ひる）

とを省略して文意の不明瞭になる例

三郎**と**太郎を訪ふ（三郎太郎の二人を訪ふといふ場合）

この文は「三郎**と**太郎**と**を訪ふ」としないと迷ふ。

泣かぬはなかり（終止形）き（連形體）し　といふ

（かういふ場合の**と**は終止形に接續するが正しいのである。）

な

忘る**な**。御油斷めさる**な**（禁止の意。終止形に附く。ラ變には「ある**な**」と連體形につく）

く　願望　感動

（倒るるな　倒るな）　（叱らるるな　叱らるな）　（持たするな……連體形＋な……不正　持たすな……終止形＋な……正）

いざ行かな。櫻かざして今日も暮さな（願望の意。）

花の色はうつりにけりな。見せばやな（感動詠歎の意）

な……そ

な……そ

な忘れそ。な行きそ。（禁止の意。な＋連用形＋そ。但しカ變、サ變には、「な＋未然形＋そ」の形をとる。なせそ。なこそ。……これは勿來關（ナコソノセキ）といふ地名を思ひ出すがいい）

っ

沖つ白波。あまつかぜ。（のにあたる。）

つつ

雨は降りつつ。讀みつつ行く（動作の進行をあらはす。しきりに、ながら等といふにあたる。解釋の際に注意）

て

櫻散る木の下蔭は寒からで。（ずしてにあたる。打消の意）

だに　せめて　でさへ

命だにあらば。いまはといはむ時だに（せめて……なりと　といふ意。）

雲だに行くを。犬だに思を知る（でさへの意）

ばや

見せばや。行かばや（願望の意。）

し

二人し行けば。無きにしもあらず。夢にし見ゆる（まあといふやうに強めていふ形、解釋の時に注意）

かし

とく行け（命令形）かし。いふもおろかなり（終止形）かし（念をおして強くいふ形。命令形又は終止形につく）

がな

人に知られで來る由もがな。なくもがな。あらずもがな（無くてくれればいいといふやうに願望をあらはす。）

疑問、反語

や、やは、かは、か（疑問、反語をあらはす、解釋の時に正確にすること）

か

うれしくもあるか。のどけくもあるか春の山邊は（感動をあらはす。かなと同

じに用ひる）

なむ

花**なむ**咲ける。これ**なむ**よき（**ぞ**に似て柔かに感動をあらはす。下を連體形で結ぶことに注意。）

訪は**なむ**。みゆき待た**なむ**（他に對して、かうしてくれればいいと希望を發する語。）

なむ　感動
希望

（折ら**なむ**
折れ**なむ**）この區別は紛れやすき品詞のところ參照。

ば、とも、ど、ども

假定と確定

これらの助詞が、それ〴〵假定の條件をあらはし、或は確定の條件をあらはすことに注意。解釋の場合特に注意すること。

雨降ら（未然形）**ば**行かじ（假定。下を**じ**と推量の意の打消にすることに注意）

雨降れ（已然形）**ば**行かず（確定。下を明確な打消**ず**で結ぶ）

山高く（形・連用形）**とも**登らむ
雨降る（終止形）**とも**行かむ　（假定、下は未來の**む**）

雨降れ（已然形）**ど**行く
雨降れ（已然形）**ども**行く　（いづれも已然形に附いて確定の條件をあらはしてゐる）

山高け**れ**（已然形）**ど**（**ども**）行く

助詞はこのほかに多くあるが、注意すべきもののだけをあげた。國文解釋の要點の一つは、助詞を正確に解釋するに在るといふことを、講評によつても、十分に知るべきである。

一七　係　結

係結の意義

上にある助詞とそれを受けて文を結ぶ語との間には一定の法則がある。それを係結の法則といふ。たとへば「夜や暗き」「花なむ赤き」「いづこにかある」「來る人ぞ稀なる」「人こそ見えね」といふやうに、上に**ぞ**、**なむ**、**や**、**か**、が係ると、結は動詞、形容詞、助動詞の連體形になる（普通は終止形）。**こそ**が來ると已然形で結ぶ。

平敍文と疑問文にのみ行はれる法則

係結の法則は平敍文と疑問文とだけに行はれる。例へば

その言やよし（まことによいことをいふ。よい言葉だ。）

といふ感動文では、**や**（感動を示す助語）があつても「よし」と終止形で結んでゐる。

この**や**は係とならぬのである。

その言**や**よき（その言ふことはよろしいか）

といへば疑問文であつて係結の法則が行はれてゐる。これを表に示すと

（係）　ぞ　なむ　や　か　やは　かは　（結）

――動詞・形容詞・助動詞の連體形。

（係）　こそ　（結）

――動詞・形容詞・助動詞の已然形

文中に係となる語があつても結びの語の略されてゐる場合が多い。

結の省略されてゐる文例

花は今ぞ見頃と告げ來り終止形ぬ。

この文は

花は今ぞ見頃なる（連形體）と告げ來りぬ

といふ文の省略されたものである。

係結に關する問題は今後も多く出されるものと覺悟すべきである。

（1）係る語と結ぶ語とをよく判斷すること。

（次ノ文ノ誤ヲ正セ）

田舍にて生れたるこそ幸なりと思ひたれ

この文は

田舍にて生れたるこそ幸なれ

といふところで係結の關係は終るのであるから、その下は「思ひたり」と普通の終止形でいいのである。こそは「思ひたり」の方にかかつて居るのではない。

（2）動詞、形容詞、助動詞の活用形を十分知つておくこと。已然形で結ぶといふやうな法則ばかり知つてゐても、已然形そのものがわからなくては、何にもならぬ。

（3）解釋文にある係結の關係を一旦普通になほしてみることは、解釋するに當つて必要である。

我こそ得めなどいふものありて後に爭ひたる……

かういふ文も「得め」といふ形に驚かず「我得むなど……」となほし得る力が無いといけない。

言ひたりしこそ苦しかりしか

これもむづかしさうだが、「言ひたりしは苦しかりき」としてみれば何でもない。

一八　紛れやすい品詞

なむ

なむ

時鳥よ花橘に宿はからなむ【時鳥よ、花橘に宿をとつてくれ。このなむは他に對する願望をあらはす助詞。から（動、四、未然形）＋なむ】

花なむ美しき【柔かに强めていふ助詞。】

花の散りなむ後【花が散つてしまつてから。散り（動、四、連用形）＋な（完了助動詞ぬの未然形）＋む（未來助動詞、連體形）】

しか

何處に行きしか【行き（動、四、連用形）＋し（過去助動詞きの連體形）＋か（疑問助詞）】

かくこそ言ひしか【かう言つた。言ひ（動、四、連用形）＋しか（過去助動詞きの已然形。こその結。）

に

に

にの例は多い。「東京に行く」「然るに」等等。その中で完了の場合に特に注意。

秋は來にけり。散りにし花。早くもさとられにけり。

し

し

花を**し**見れば。生きと**し**生ける者……。【「花を見れば」「生きと生ける者」（すべての生きてゐる者）」と同じ。強めていふ助詞）】

太郎といひ**し**人（過去**き**の連體形）

ばや

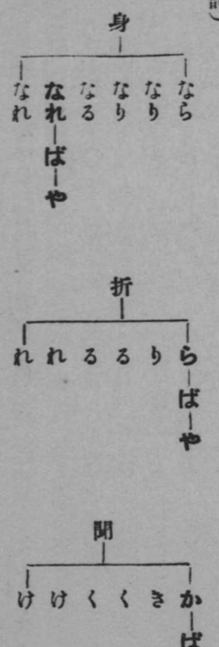
ばや

草の葉にかかれる露の身なれ**ばや**……【（はかない命をもつた身であるためか……。

なれ（指定助動詞**なり**の已然形）＋ば（助詞・確定條件）＋や（疑問助詞）】

心あてに折ら**ばや**折らむ……（心あてに折つたら折れるであらうか、折つてみよう……。**ば**が未然形について假定の條件をあらはしてゐる。）

聞か**ばや**（聞かう。聞きたいものだ。ばやは活用言の未然形に附いて願望を表す助詞）

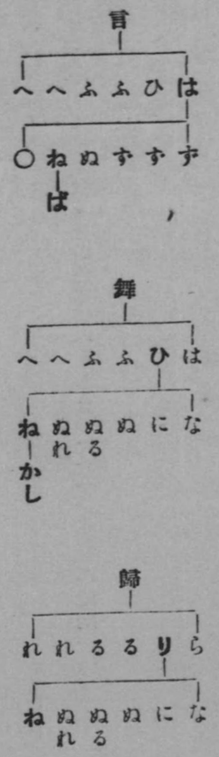


ね

ね

桃李言は**ね**ば誰と共に昔を語らん（打消**ず**の已然形。桃李は語らないからして）

春の姿を舞ひ**ね**かし。早く歸り**ね**（完了**ぬ**の命令形。單に「舞へ」「歸れ」といふよりも強い形。舞ひなさい歸りなさい）



な

な

雨晴れ**な**ば【單に「晴れば」といふよりも強い。晴れ（動、下二、未然形）＋な（完了**ぬ**の未然形）＋ば（助詞雨がやんだら）】

晴―れ―な―ば
る　に
るる　ぬ
るれ　ぬる
れよ　ぬれ
ね

花の色はうつりにけりな（花の色は変へてしまつたなア。詠歎の助詞）

春を忘るな（禁止の助詞）

文章篇

文章法の中で問題とされるのは、「次ノ文ノ主語ト述語トヲ指摘セヨ」といふのが一番多い。次には「次ノ文中ノ句（節）ヲ示セ」といふのである。**主語**と**述語**。この二つを明瞭に認識することが大切で、これは國文解釋においても、文脈を正しくとらへるために、常に頭におくべきことである。**節（句）**をとらへることも、複雑な文に對して主語述語の關係を正しく見得るかどうかを試みるために必要な練習である。

一　文の成分

文には大體次の三つの型がある。

何ガ　ドウスル
何ガ　ドンナダ
何ガ　何ダ

この**何が**に當る部分が主語で、それに對して**ドウスル**、**ドンナダ**、**何ダ**と述べる部分が述語である。**節（句）**は主語述語を備へてゐながら文全體の一部分をなしてゐるものである。

風が（主）吹く（述）。　山が（主）高い（述）。　彼は（主）英雄だ（述）。

文の成分
主語
述語
節

修飾語

形容詞的修飾語
副詞的修飾語
連體修飾語
連用修飾語

節　節

風が　吹く日は寒い。日本は山が　高い國だ。

ひどい風が北から吹く

このひどい　北から　が修飾語である。「ひどい」は風を形容してゐるから形容詞的修飾語であり、「北から」は風の來る方向を限定してゐるから副詞的修飾語である。

風が體言であるから、それに連らなる修飾語といふ意味で、ひどいを連體修飾語ともいひ、用言に連らなる修飾語（ここでは北から）を連用修飾語ともいふ。

副詞的修飾語の中に客語、補語を置いた本もあるが、ここには單純を尚び、項目の多くなるのを避けて、すべて副詞的修飾語中に含ませておいてみる。

獨立語

おゝ　ひどい風が吹く

このおゝは感動の語である。かういふ感動の語、或は「太田君」などと呼びかけ、「神よ」などといふ呼びかける語は、文の組織から離れたものであるから獨立語といふ。獨立語にはこのほか、「はい」「いや」「いいえ」などと返答する語、「けれども」「されば」などと接續させる語などがある。また

私は梅の花を好む

といふ文の梅の花といふことを特に明瞭に示すために、

梅の花、私はこの花を好む

とすれば、「梅の花」は獨立語（提示語）となる。提示するために拔き出したあとへは「この」「その」等の代名詞をおくのが常である。要するに主語でも述語でも修飾語でないものが獨立語なのである。

二　成分の倒置省略

文の成分が省略されたり倒置されたりしてゐる場合がある。

獨立語（修飾語）主語（修飾語）述語

これが普通の文の形であるが、文に勢をつけるやうな場合、或は簡略にする場合、その成分の位置をかへたり、省略したりする。國文解釋の際、その略されてゐる主語や述語をみつけて、それを頭に置いてかかることが必要である。

倒置例

正直の頭に神宿る（神は正直の頭に宿る）

歌書よりも軍書に悲し吉野山（吉野山は歌書より軍書に悲し）

省略例

この土手に登るべからず（人々といふ主語）
いざさらば雪見にころぶところまで（行かんといふ述語）
苦は樂の種（なりといふ述語の一部）

三　文の構成

どんな複雜な文でも、結局それを組立てゝゐる根本の成分は主語と述語とであり、それに修飾語が附き、獨立語があるといふにとどまる。

從つて國文解釋に當つても、先づ第一に主語と述語とを見出し、それに附屬するもの、即ち修飾語を知ることが必要である。即ち主となる部分、それを受けて說明する部分、これが相依つて文を構成するのである。

主部　修飾語＋主語
述部　修飾語＋述語

いかなる文も　主部、述部、それに獨立部、この三つに分けることが出來る筈である。主語、述語が萬一よくわからぬ場合にも、おほづかみに主部　述部と區分することは出來るであらう。先づ主部述部と分けて、主部の中から主語をえらび出す、述部の中から述語をさがすといふやうにしてもいい。

四　節（句）の種類

節（句）とは、主語・述語、即ち一文としての成分を備へながら全體の文から見ると、その一部となつて働いてゐるものを指すことは前に言つた。ここには、その働きによる種類をあげる。

主語節（主語の役をする節）
　主語節
　　身體の（主語）　健康なるは（述語）　幸福なり
述語節（述語の役をする節）
　日本は（主語）　山岳（主）　多し（述語節）
修飾節（修飾語の役をする節）

連體修飾節

(1) 花(主)　咲く(述)　修飾節　春は(主語)　のどかなり(述語)

連用修飾節

(2) 春は(主語)　花(主)　咲けば(述)　修飾節　樂し(述語)

(1)は春といふ體言につづくから連體修飾節、(名詞句)。(2)は樂しといふ用言につづくから連用修飾節(副詞句)といふ。

對立節

對立節(主從の關係なしに相並ぶ節)

雨(主)　降り(述)　對立節　風(主)　吹く。(述)　對立節　山(主)　高く(述)　對立節　月(主語)　小なり。(述語)　對立節

五　文の構成上の種類

單文

單文

節(句)を含まぬ文

小僧が(主語)　ねむつてゐる。(述語)

山の下の古い大きな寺の小僧が(主語)　机の前でいかにも氣樂さうにねむつてゐる。(述語)

どんなに長い文でも(即ち修飾語がいくつあつても)主語と述語との關係が一文中にただ一度であるものは單文である。

複文

複文

節(句)を含む文。

春は(主語)　小僧の(主)　連體修飾節　ねむる(述)　間に　過ぎ去る(述語)

重文

重文

對立節のある文

天は(主)　晴れたり(述)　對立節　氣は(主)　澄みぬ。(述)　對立節　人生は(主)　短く(述)　對立節　藝術は(主)　長し。(述)　對立節

文の性質上の

以上は構成から見た文の種類であるが、內容(性質)から見た種類には

種類

平敍文
疑問文（反語文）
命令文
感動文

などがある。平敍文は普通の説明記述をなす文である。

花ぞ咲く（これは、ぞと強めて言ふだけのことで平敍文である）
ああ花が咲く（これは、感動の心を表す感動文である。）

動詞、助動詞接續表

動詞、助動詞接續表

種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形 假定形	命令形	接續
受身	られ られ レ ラレ	られ られ レ ラレ	る らる レル ラレル	る らるる レル ラレル	れ られ レ ラレ	れよ られよ レ ラレ	四、ナ變、ラ變 未然形 右以外の四 未然形 右以外の 未然形
可能	べし らるる レル ラレル						推量のべしと同じ 受身の場合と同じ
使役	す さす しむ しめ サセル	せ させ しめ サセ	す さす しむ サセル	する さする しむる サセル	すれ さすれ しむれ サセレ	せよ させよ しめよ サセロ	四、ナ變、ラ變 未然形 右以外の全動詞の四 未然形 右以外の 未然形
尊敬	らる る レル ラレル マス	せ させ しめ サセ マセ	せ させ しめ サセ マシ	せ させ しめ サセ マス		せよ させよ しめよ サセロ マセ	受身の場合と同じ。 使役の場合に準ず 受身の場合と同じ。 全動詞 未然形
完了	つ ぬ たり タリ	て に たり (り) タリ	て ぬ たり タリ	つる ぬる たる タル	つれ ぬれ たれ (れ) タラ	てよ ね	全動詞 連用形 四、サ變 已然形 全動詞 未然形 連用形
過去	き けり タ	(けら)	き けり	し る	しか けれ		全動詞 連用形 カ變サ變に例外あり。一五七頁參照 全動詞 連用形 完了の場合と同じ
未來	む ウ ヨウ		む ウ ヨウ	む ウ	め		全動詞 未然形 四 未然形 右以外の 未然形
打消	ず ざり ナイ	ず ざり ズ ナク	ず ざり ヌ ナイ	ぬ ざる ヌ ナイ	ね ざれ ネ ナケレ	ざれ	全動詞 未然形 全動詞 未然形
推量	む まし ら むら しら めり べし けむ まじ(打消) じ(打消) ウ ヨウ ラシイ マイ(打消)	べく まじく	べく まじく ラシク		む まし ら むら めり べし けむ まじ ウ ヨウ ラシイ マイ		全動詞 未然形 ラ變 連體形 右以外の 終止形 全動詞 連用形 右以外の 連體形 全動詞 終止形 未來の場合と同じ 全動詞 終止形 四 終止形 右以外の 未然形
指	なり たり	なり たり	なり たり	なる たる	なれ たれ	なれ たれ	全動詞 連體形 體言

種類	活用					接續
尊敬	サセル	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセロ	右以外の未然形
	る	せ	せ					受身の場合と同じ。
	らる	せ	せ					使役の場合に準ず
	す	さす	さす					
	さす	させ	させ					
	しむ	しめ	しめ					
	しる							
	レる							受身の場合と同じ。
	ラレる							
	マス	マセ	マシ	マス	マス	マスレ	マセ	全動詞 未然形
完了	つ	て	て	つ	つる	つれ	て	全動詞 連用形
	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	
	たり	たら（ら）	たり（り）	たり	たる	たれ（れ）		四、巳然形 未然形 連用形 サ變 全動詞
	タリ	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	ラ	
過去	き	（けら）		き	し	しか		全動詞 連用形 カ變、サ變に例外あり。一五七頁參照
	けり			けり	ける	けれ		全動詞 連用形
	タ			タ	タ	タ		完了の場合と同じ
未來	む			む	む	め		全動詞 未然形
	ウ			ウ				四 未然形
	ヨウ			ヨウ				右以外の 未然形
打消	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね		全動詞 未然形
	ざり	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ	
	ヌ	ざら	ざり	ヌ	ヌ	ネ		全動詞 未然形
	ナイ	ナク	ナク	ナイ	ナイ	ナケレ		
推量	む			む	む	め		全動詞 未然形
	ましし			ましし	ましき	ましか		
	らむ			らむ	らむ	らめ		ラ變 連體形
	らし			らし				右以外の 終止形
	めり			めり	めり	めれ		
	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ		全動詞 連用形
	けむ			けむ	けむ	けめ		ラ變 連體形
	じ（打消）			じ				右以外の 終止形
	まじ（打消）	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ		全動詞 未然形
	ウ			ウ				
	ヨウ			ヨウ				
	ラシイ		ラシク	ラシイ	ラシイ			
	マイ（打消）			マイ				
指定	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	全動詞 連用形
	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	體言 連體形
	ダ	ダラ	ダリ	ダ	ナ	ナラ		全動詞（間にのをおくことが多い） 連體形
	デス	デセ	デシ	デス				
願望	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ		全動詞 連用形
	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		同 未然形
	タイ		タク	タイ	タイ	タケレ		同 連用形
詠歎	なり			なり	なる	なれ		ラ變 右以外の 連體形
	けり			けり	ける	けれ		全動詞 終止形 連用形
比況	如し	如く	如く	如し	如き			全動詞 連體形

○片假名は口語。

○助動詞が他の助動詞に接續する場合の法則は、動詞の場合に準ずる。

○詠歎といふ種類をあげぬ本もある。また、まじ　じを打消に入れておくといふやうな點で、本によつてちがふところがある。

○やうだ　さうだをそれ〳〵比況推量に入れてある本もある。